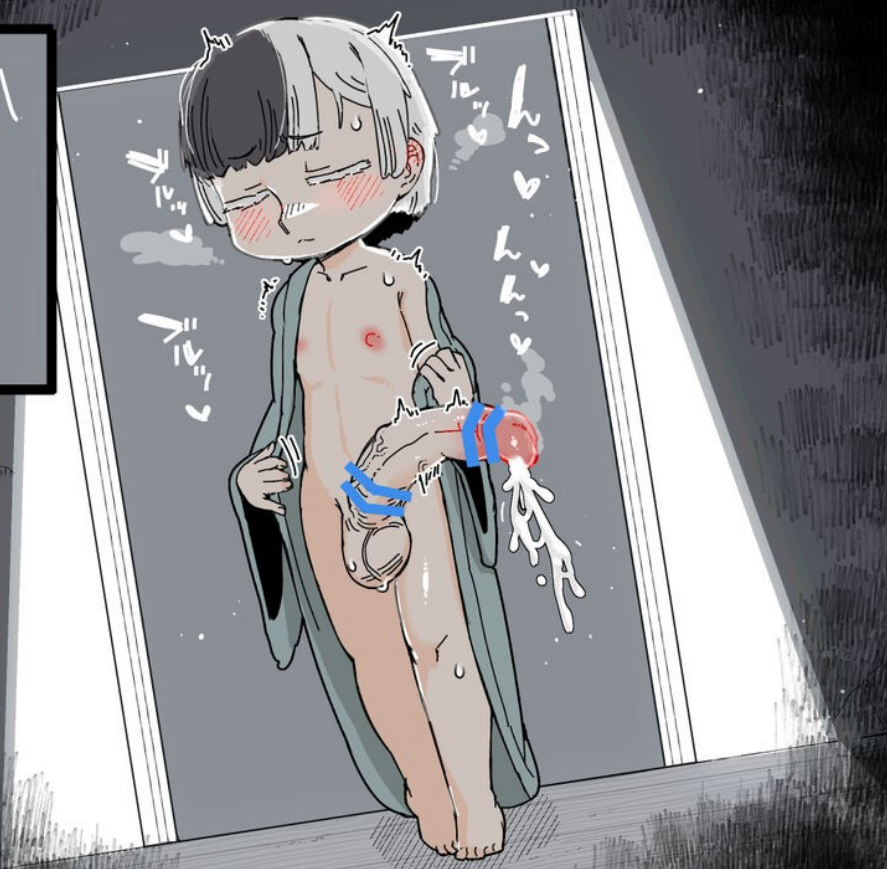


# 蔵からの手紙

まとわりつくニオイ







1の手紙  
母から僕宛てのもの

僕は夜分、下宿の主人から  
細長い封筒をうけとる

ミツオリになった用紙には  
細い神経質な字で  
唯一の男手であった僕が  
実家をでていつてしまい  
そうしたことがどれだけ  
母の精神を苦しめているか  
どうか戻ってきて欲しいとの  
懇願と嫌味が3枚にわたって  
つづってある

相変わらず  
ひとりよがりな  
ひと

仕送しも徐々に  
減ってついに  
手紙だけになった





手紙に染み付いた



鼻腔で  
感じ取る




なつかしくて  
きらきらする




自分の  
生まれた家では

常にこの分子が  
空気中に漂っていた



玄関から客間  
台所から風呂

畳や階段  
襖も柱にも



あらゆるもの  
そばにじゅう  
こびり付いてる  
カビカビに濁いた  
干物みたいなニオイ

鼻の奥につくと  
頭がくらくらする

なつかしい  
すえたニオイに  
体が勝手に  
反応してしまう

♡...♡

むわっ♡

これではまるで  
心理学でいう  
パプロフの犬だ





さっき出したばかりなのに……♡

また……♡

しゅる、♡♡

あ、♡

ほかみたいに勃起しやすい体質に嫌気がする！

ニオイの分子⇨勃起  
なんて迷惑な心理回路！

ネット……♡



心根から望んでるわけではない

もしそうなら僕はまったくの変態性欲の持ち主だといふことになってしまう

...

...



こんな手紙が悪いのだ

勃起したチンポに手をかざすとあったかい



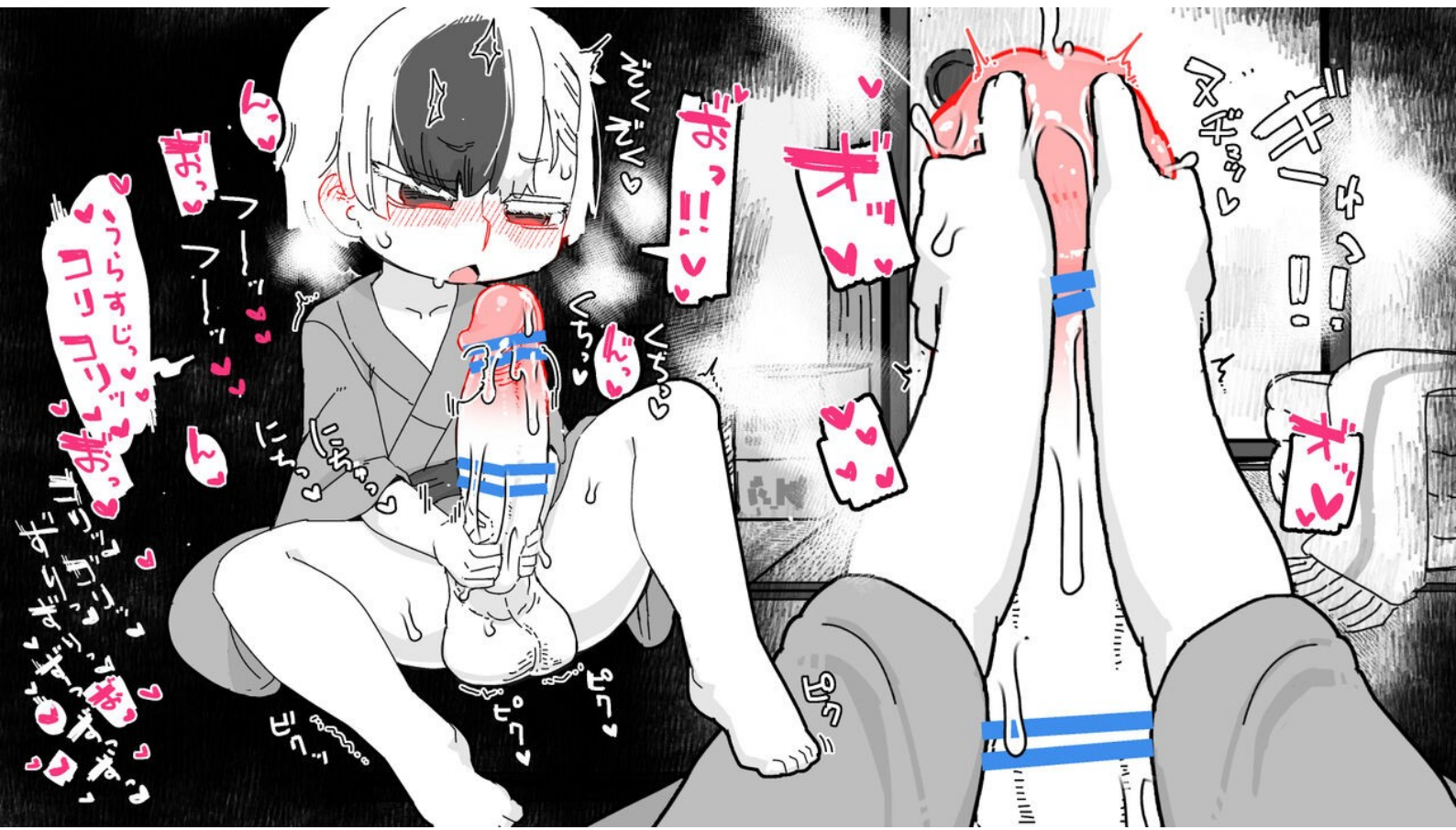
まいにちまいにち  
あきもせず...  
♡

おっ...  
♡

しょうがないヤツめ  
♡













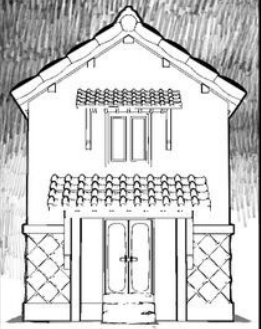


こんなこと  
続けていると

あの家にいるのと  
何も変わらない



実家の土蔵には  
『フタ様』という  
化け物がいた



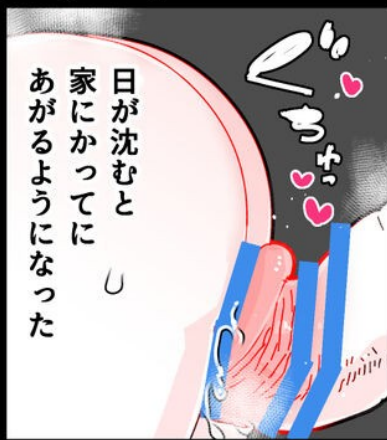
月の無い真つ暗な夜のみ  
土蔵の門が抜かれ  
フタ様がうちにくる



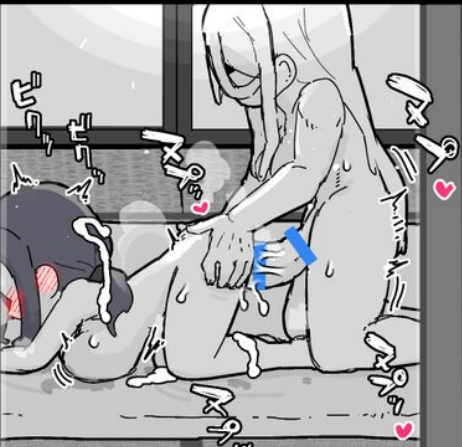
しかし  
父様の死後

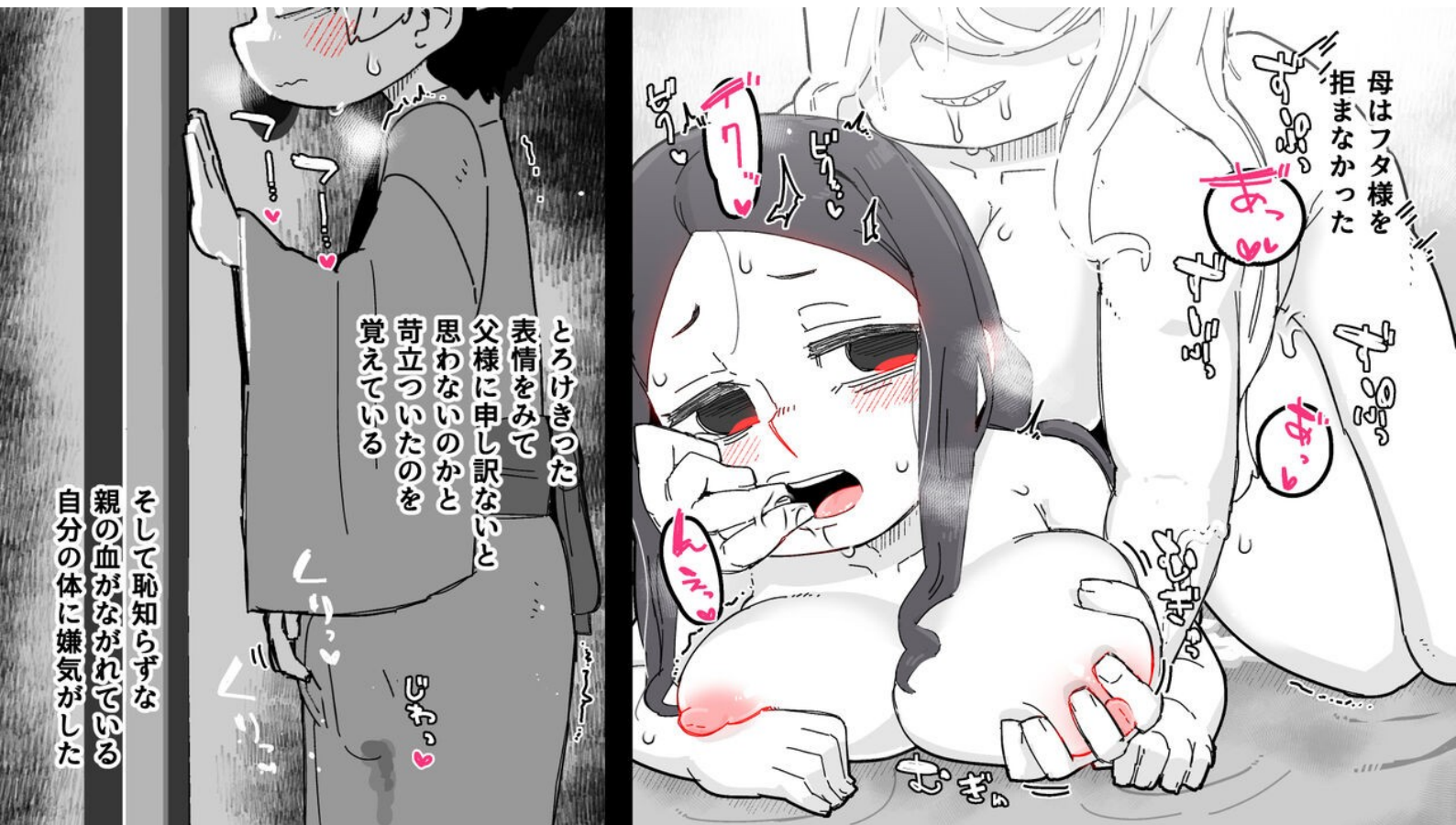


日が沈むと  
家にかつてに  
あがるようになった



毎晩フタ様は  
大きい手で  
母のむちむちした  
尻をがっちりつかみ  
ばんばん ばんばん  
腰をうちつける





母はフタ様を  
拒まなかった

フタ  
フタ  
フタ

とろけきつた

表情をみて  
父様に申し訳ないと  
思わないのかと  
苛立ついたのを  
覚えている

そして恥知らずな  
親の血がながれている  
自分の体に嫌気がした



2の手紙  
妹から僕に宛てたもの

大きく丸い字で  
ひらがなが多い  
母が病に臥せたので  
かわりに自分が書いたとある



「あにさま また  
山ブドウをいっしょに  
さがしにゆきまじょう」



あにさまと呼んで  
どこへでもついてくる  
小さな妹を思い出すと  
自然と笑顔になっていた

郷里の空が  
臉の裏によみがえる





それでも あにさま  
おげんきで

美しい日々に  
思いをはせていたが

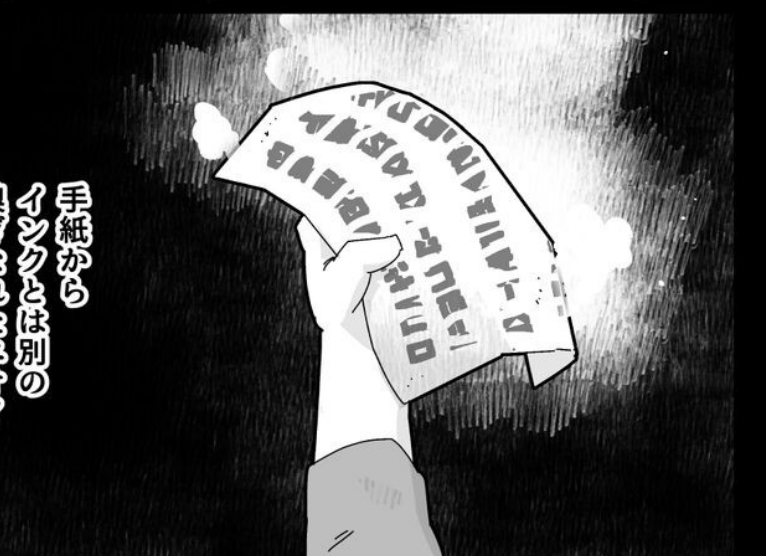
開け放した窓から  
冷たい風が吹き込み  
現実に引き戻される



2人とも夕立で  
びしょびしょになり  
叱られたこともあったな

ギョッ

ギョッ

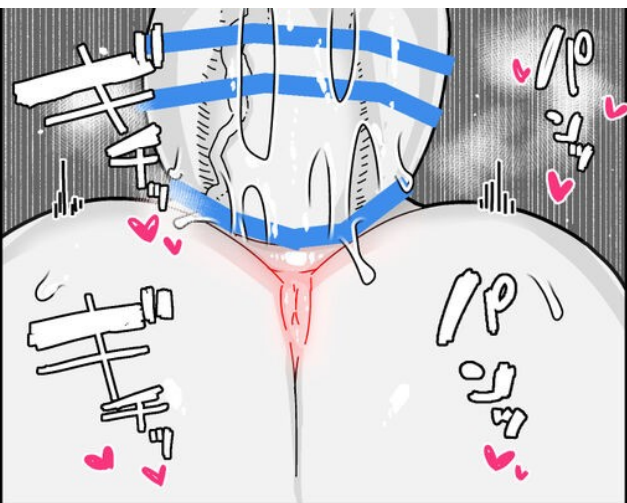


手紙から  
インクとは別の  
嗅ぎなれたニオイ



高く伸びる積乱雲  
青々とした野山も  
ここには無い  
ひとりしかない部屋

気分が乏しくなる



ああ  
この手紙を書きながら  
妹は  
ああ  
ああ



ああ  
いやだっ

...♡

もわっ

ぽろぽろ

あふれ出る精液を  
生々しく幻視してしまっ

どんな気持ちで  
書いたのだろう

股から精液を  
垂れ流しながら  
書いた手紙







指で輪をつくり  
カリ首を何度も何度も  
なせてやると

うれしそうに  
よだれを垂らす

よりもよって  
自分の妹に  
たいして〜っ!!

この我儘チンポ!  
色ボケ!遠慮なし!

おん  
おん  
おん

おん  
おん  
おん

おん  
おん  
おん

おん  
おん  
おん

おん  
おん  
おん

おん  
おん  
おん



興奮収まると  
次第に侘しさが  
生じた

おととい  
襟巻きを売りに  
質屋へ行った帰り

ふら

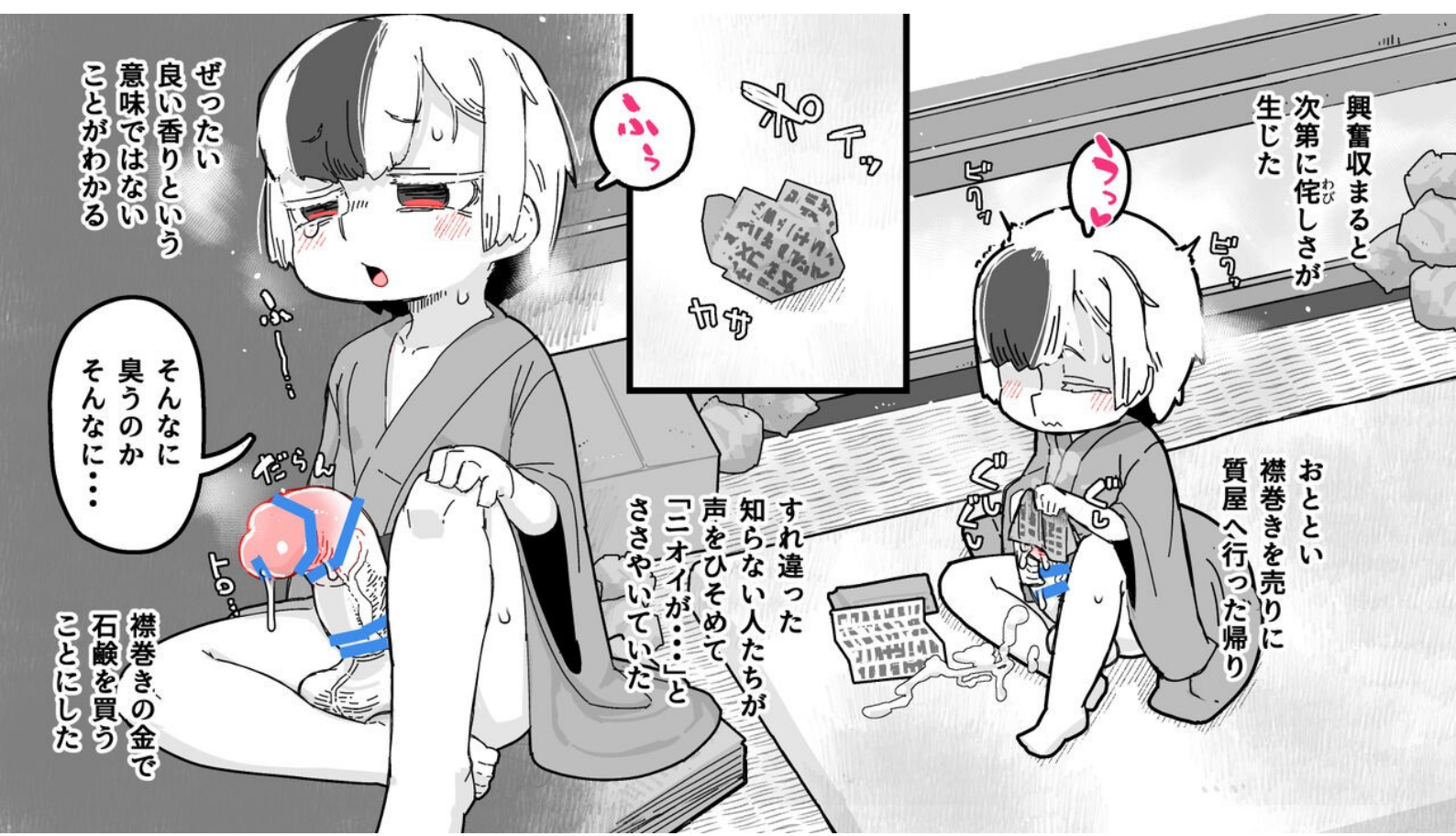


すれ違った  
知らない人たちが  
声をひそめて  
「ニオイが……」と  
ささやいていた

ぜったい  
良い香りという  
意味ではない  
ことがわかる

そんなに  
臭うのか  
そんなに……

襟巻きの金で  
石鹸を買う  
ことにした





午前中  
雨が軽く振っている

その日の部屋の空気は  
使用済みのちりがみを  
鍋で煮詰めたように  
濃いものだった

「あにさま  
おげんきでしうか  
あの手紙をだしたあと  
わたくしは  
おかあさまの  
代わりにオットメを  
することになりました」

「おかあさまが  
していた オットメ  
たいへんですが  
がんばっています」

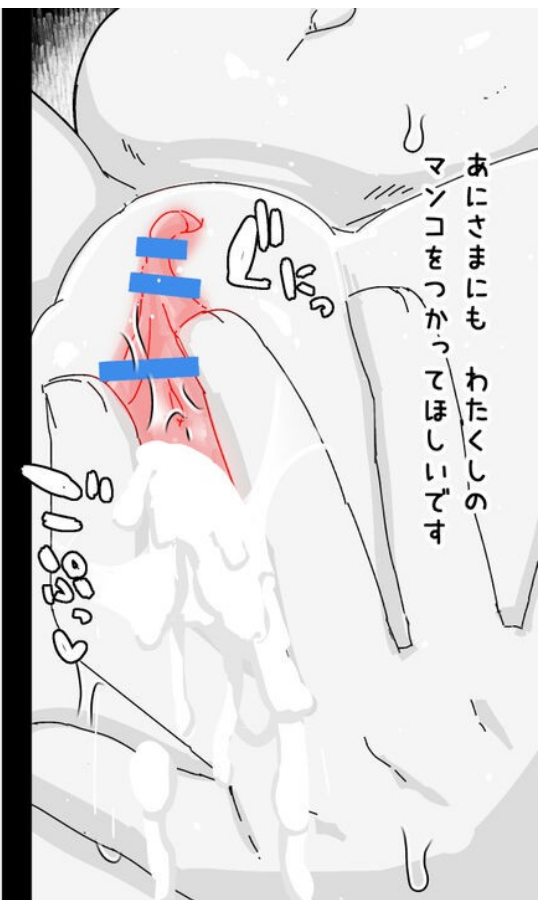
手紙からは  
部屋の空気にも  
劣らない  
オスとメスの  
交じり合った  
ニオイがした





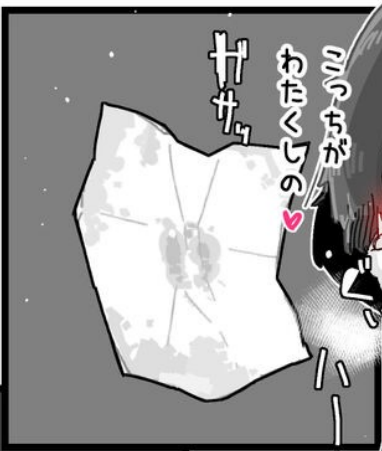






フタヤまもおかあさまも  
よくのびるいいマンコだ  
ってほめてくれました♡♡

気持ちいい  
穴だ♡♡



卑猥な形の染みから  
とても濃いニオイがする

2まい目は  
おかあさま♡

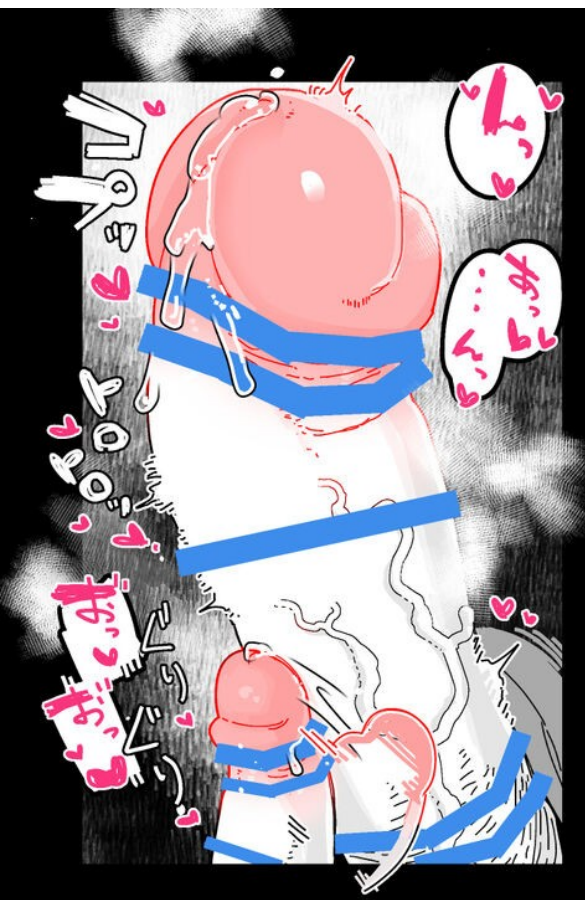




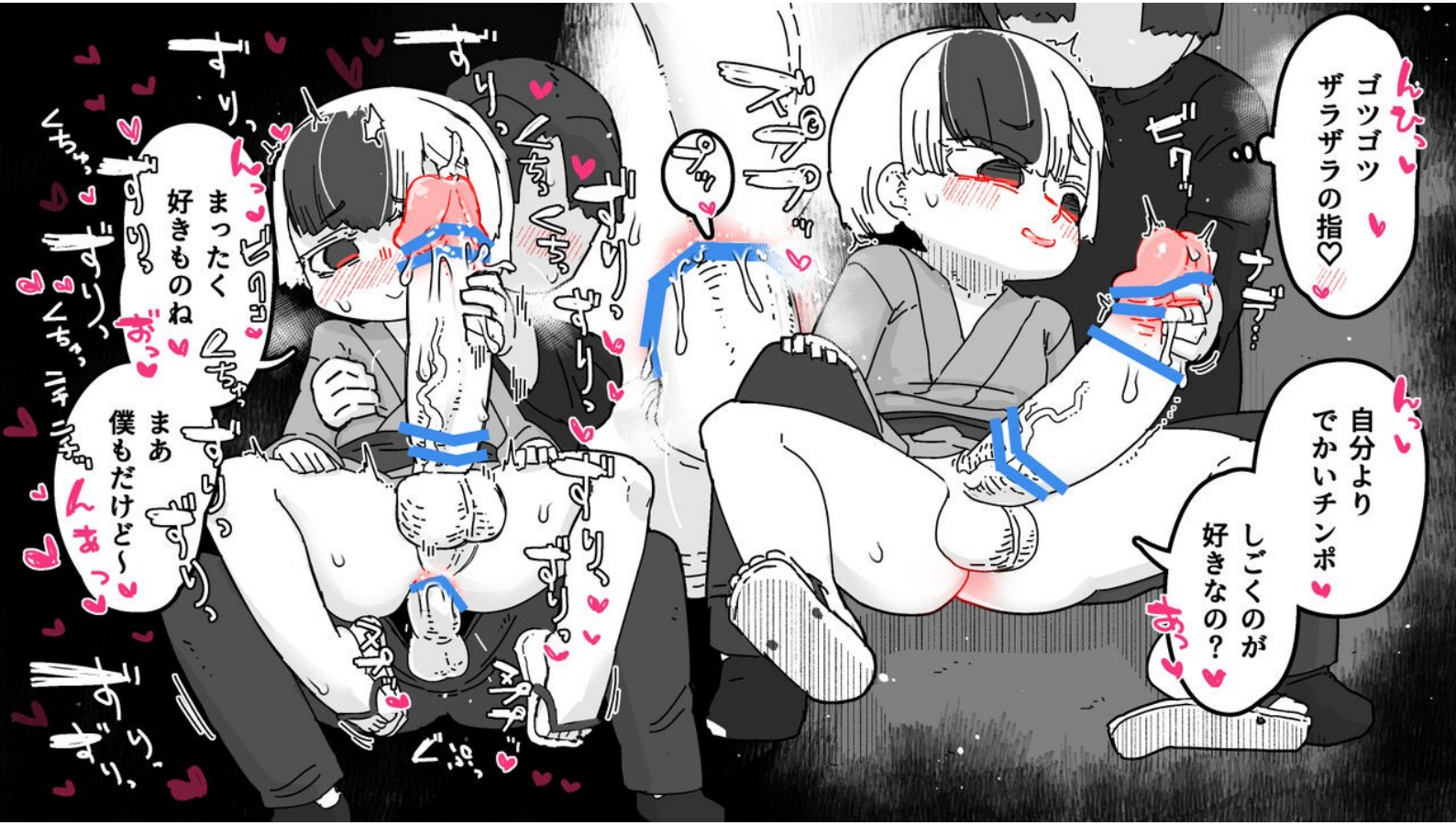












ゴツゴツ  
ザラザラの指♡

自分より  
でかいチンポ♡

しごくのが  
好きなの？♡

まったく  
好きものね♡

まあ  
僕もだけども♡





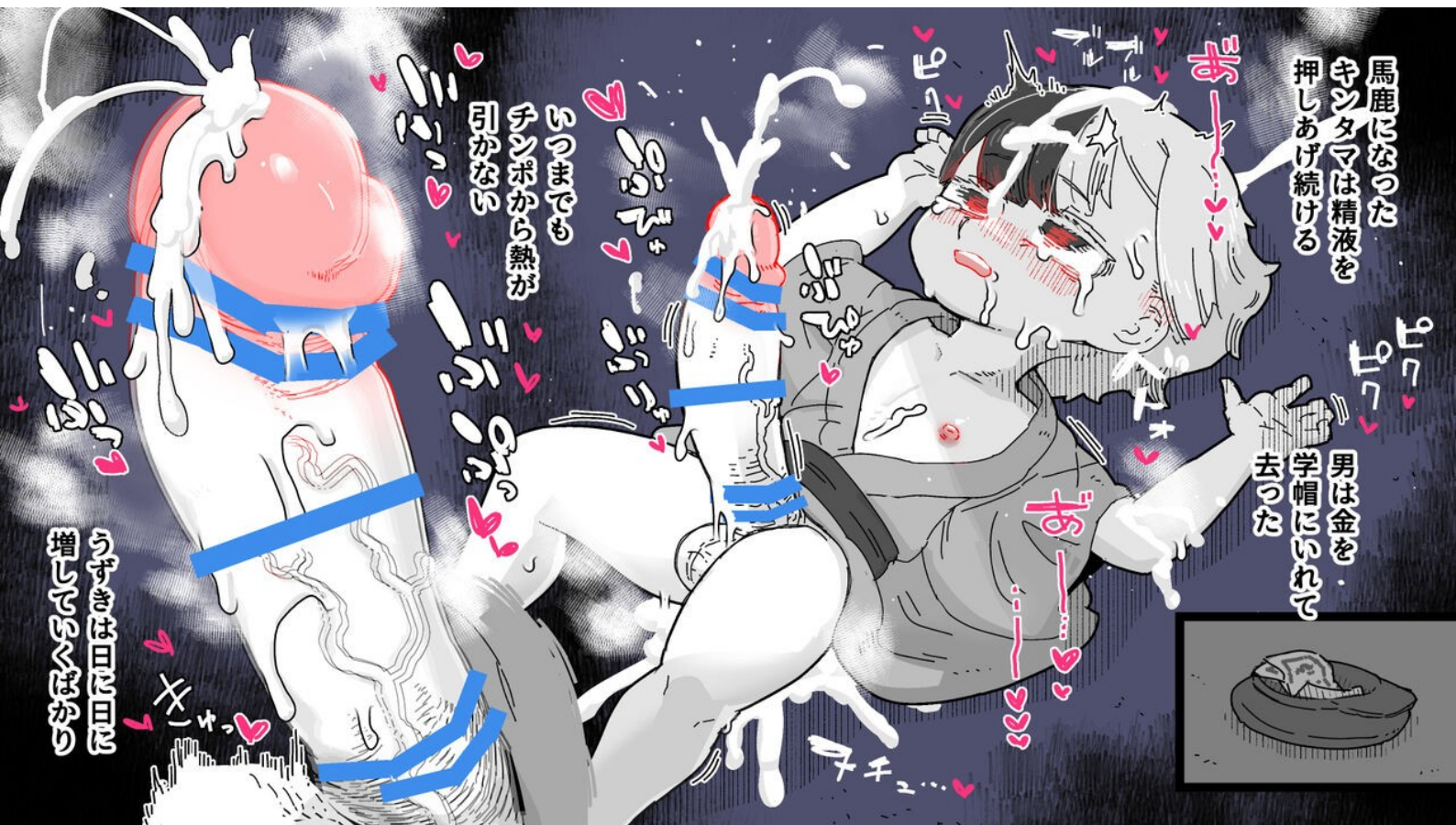
まっつとまっつと  
ちよっ  
まっつとまっつと

おかまいなしに  
しごかれる

水鉄砲みたいに  
チンポ射精

射精停止の懇願  
男の腕による  
チンポ屈服

背徳神経が刺激され  
脳内で火花が  
何度かはじけた



馬鹿になった  
キンタマは精液を  
押しあげ続ける

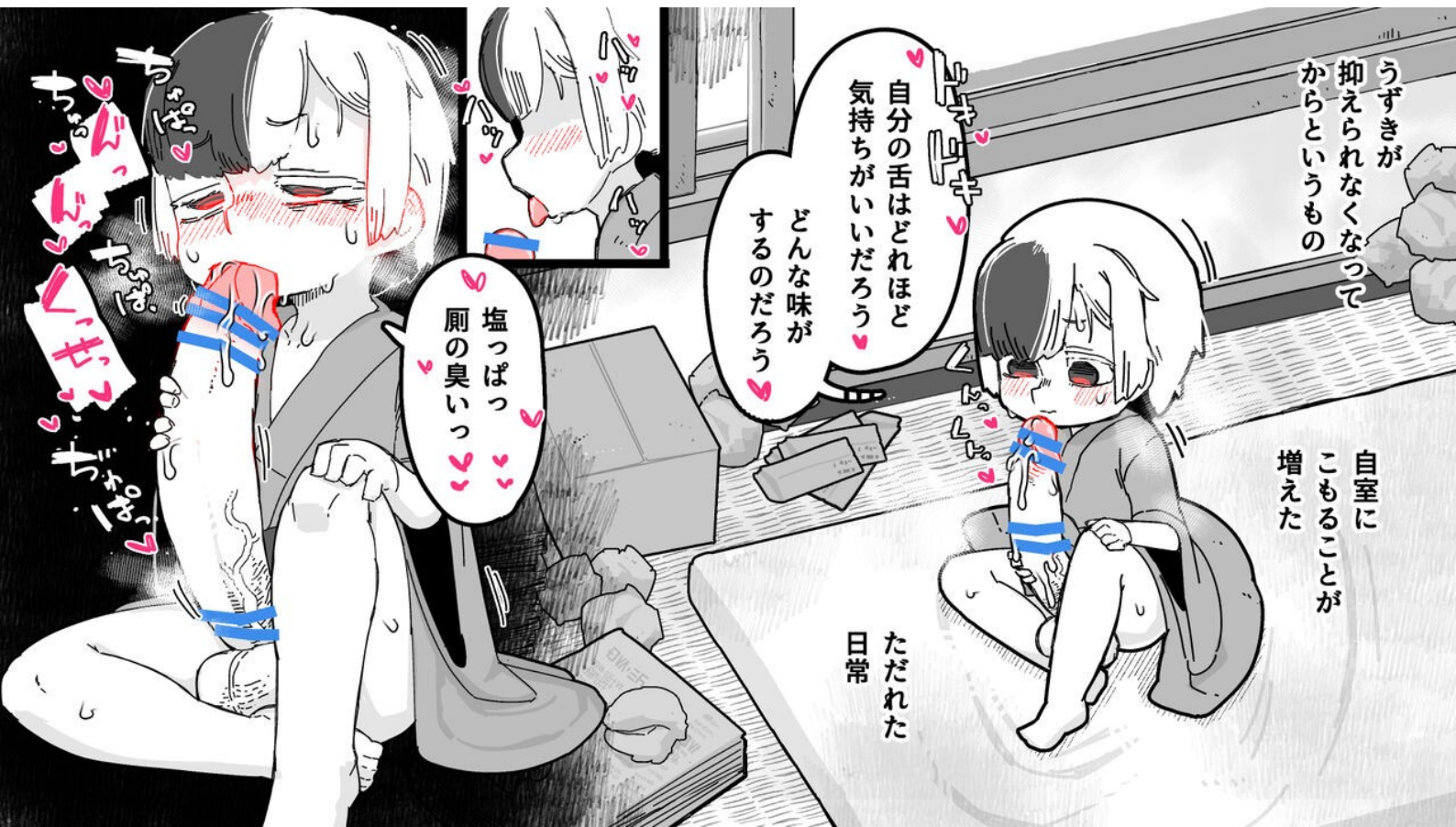
男は金を  
学帽にいれて  
去った

いつまでも  
チンポから熱が  
引かない

おーおーおーおー  
おーおーおーおー







塩っぱっ  
厠の臭いっ

自分の舌はどれほど  
気持ちがいいだろう

どんな味が  
するのだろう

うずきが  
抑えられなくなつて  
からというもの

自室に  
こもることが  
増えた

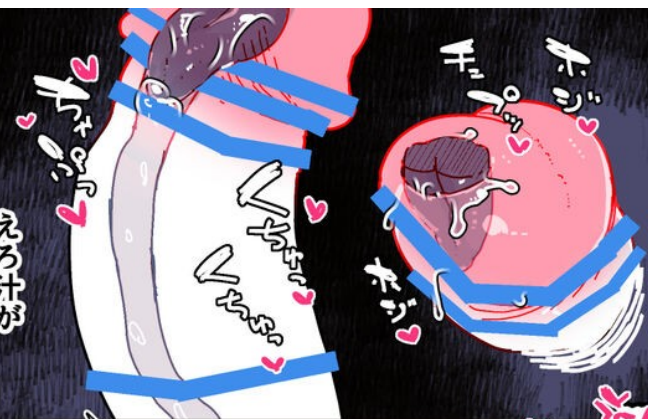
ただれた  
日常



胃の中を  
精液が満ちます

えろ汁が  
湧き出して  
舌にあたる

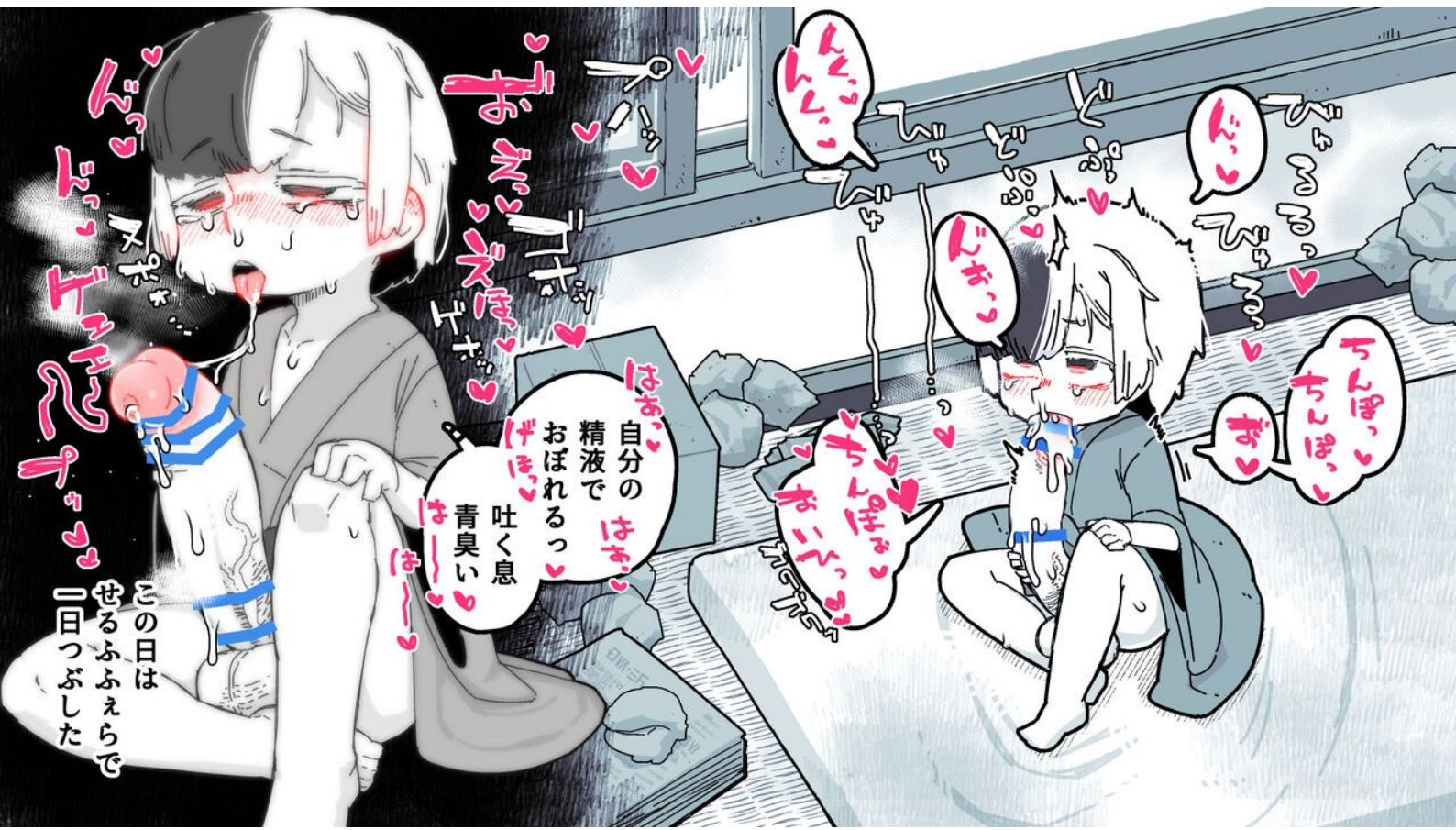
じゅわじゅわ  
えろ汁の  
癖になる味



息もわすれて  
尿道をほじほじ



じんじん  
えろ汁



この日は  
せるふふえらで  
二日つぶした

自分の  
精液で  
おぼれるっ  
吐く息  
青臭い

はあはあ

はあはあ

はあはあ





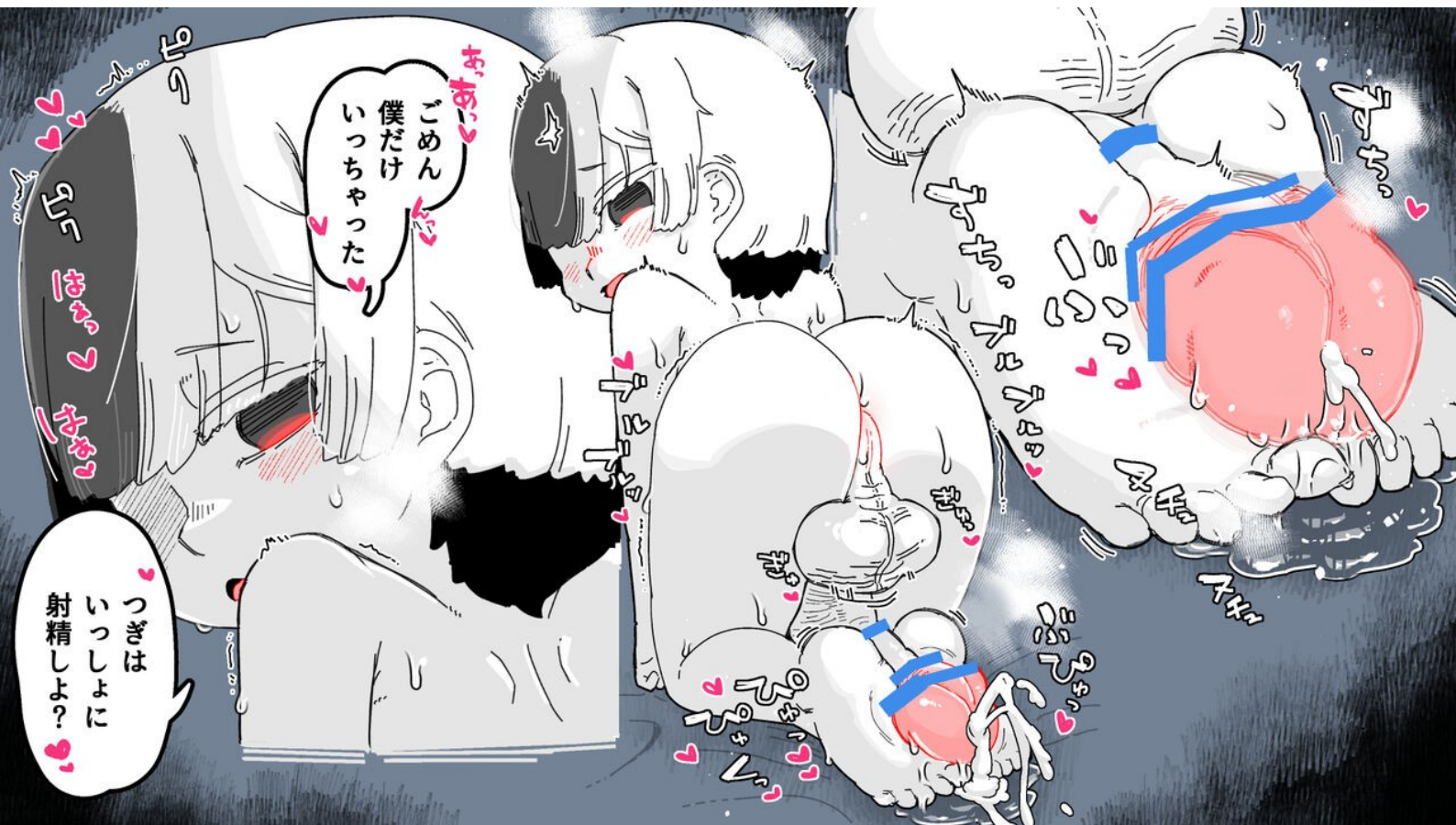
ほら♡チンポ  
おつきくなりすぎて  
足で挟めるんだよ♡

オニイサン  
僕のデカチン  
しっかりみて♡

みながら  
チンポして♡

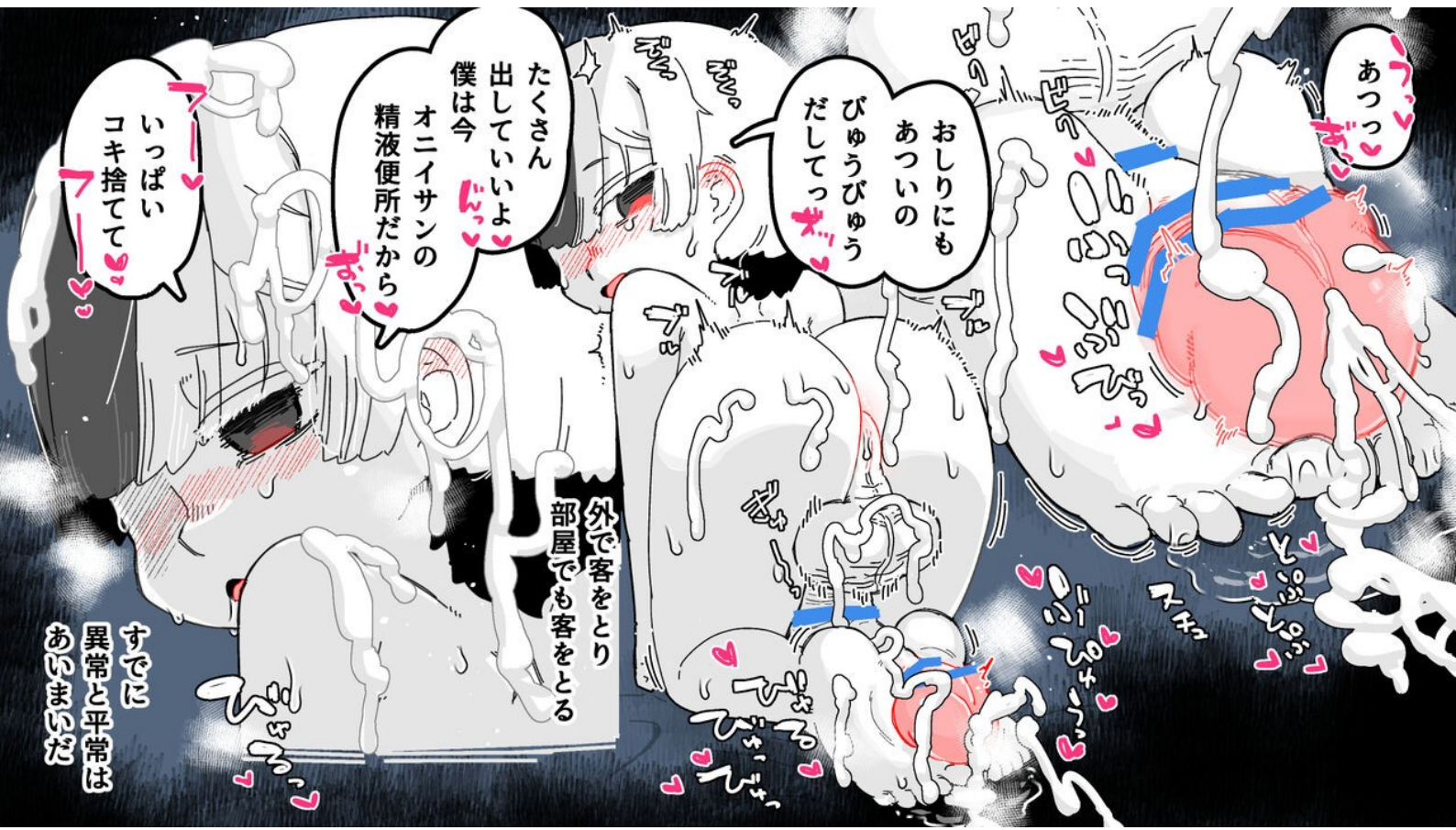
♡♡♡  
♡♡♡  
♡♡♡

別の日  
連れ込んだ  
男と連れオナ



ごめん  
僕だけ  
いっちゃった

つきは  
いっしょに  
射精しよ?



あつっ

おしりにも  
あついの  
びゅうびゅう  
だしてっ

たくさん  
出していいよ  
僕は今  
オニイサンの  
精液便所だから

いっぱい  
コキ捨てて

外で客をとり  
部屋でも客をとる

すでに  
異常と平常は  
ありまいた



3の手紙  
生家周辺の住民から  
僕に宛てたもの

家人が誰も  
いなくなり  
廃墟となっている

取り壊すので  
家財道具などを  
片付けてほしいと  
手紙が届いた

いつの間にか  
誰もいなくなつて  
お手伝いの人も  
家族もいない  
抜け殻の家



人がいない？



そもそも  
なんで勝手に  
取り壊しなんて

夢遊病者の如く  
ふらふらと  
実家に向かう

目屋社

かかとか  
やたらと  
軽く感じた

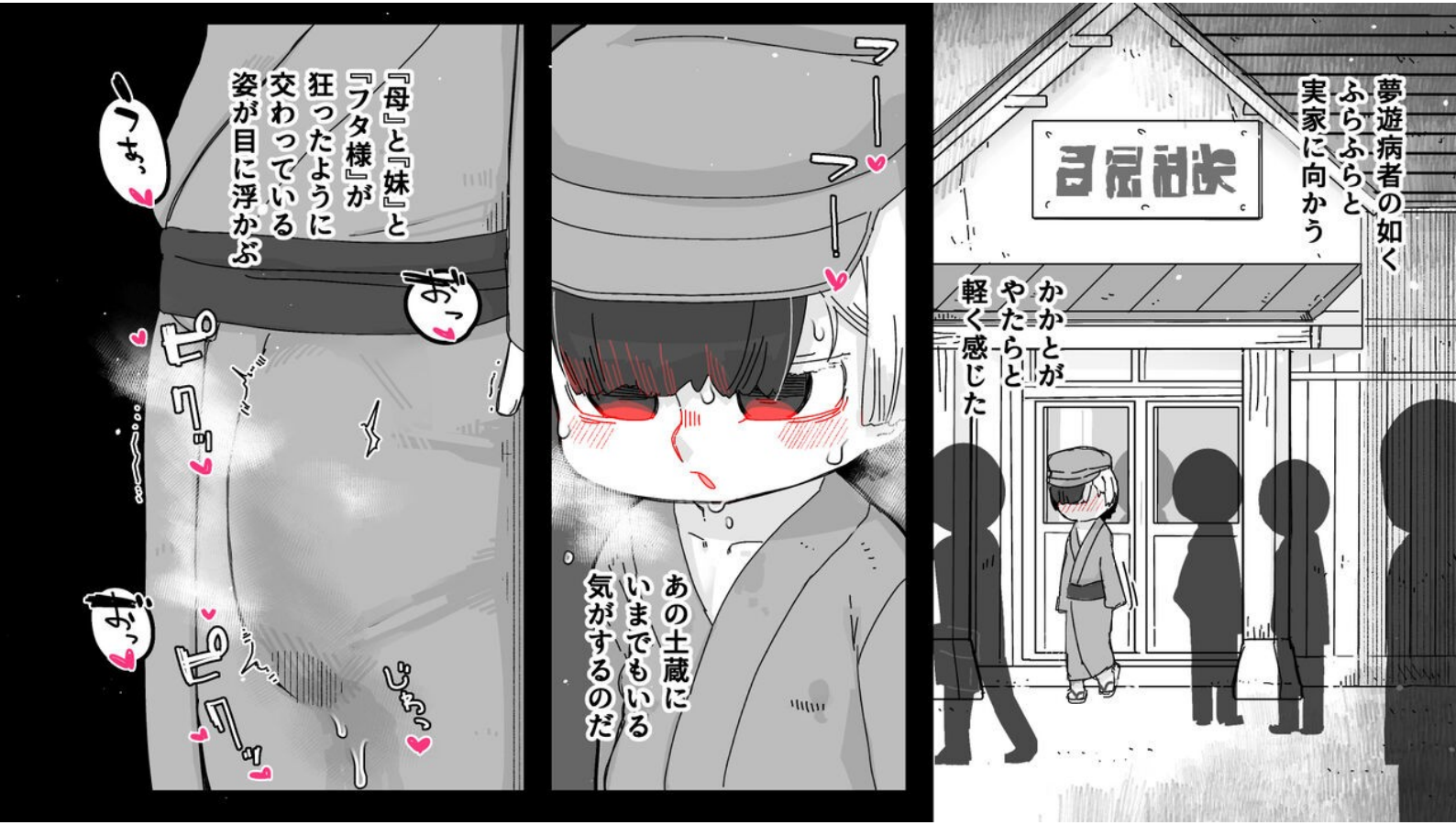
あの土蔵に  
いまでもいる  
気がするのだ

『母』と『妹』と  
『フタ様』が  
狂ったように  
交わっている  
姿が目に見え

！

！

！



廊下いや  
家の外まで  
聞こえるような  
はしたない声が

あや  
きりきりきりきり

あやあや  
あやあや  
あやあやあや

そんなわけが  
無いだらう

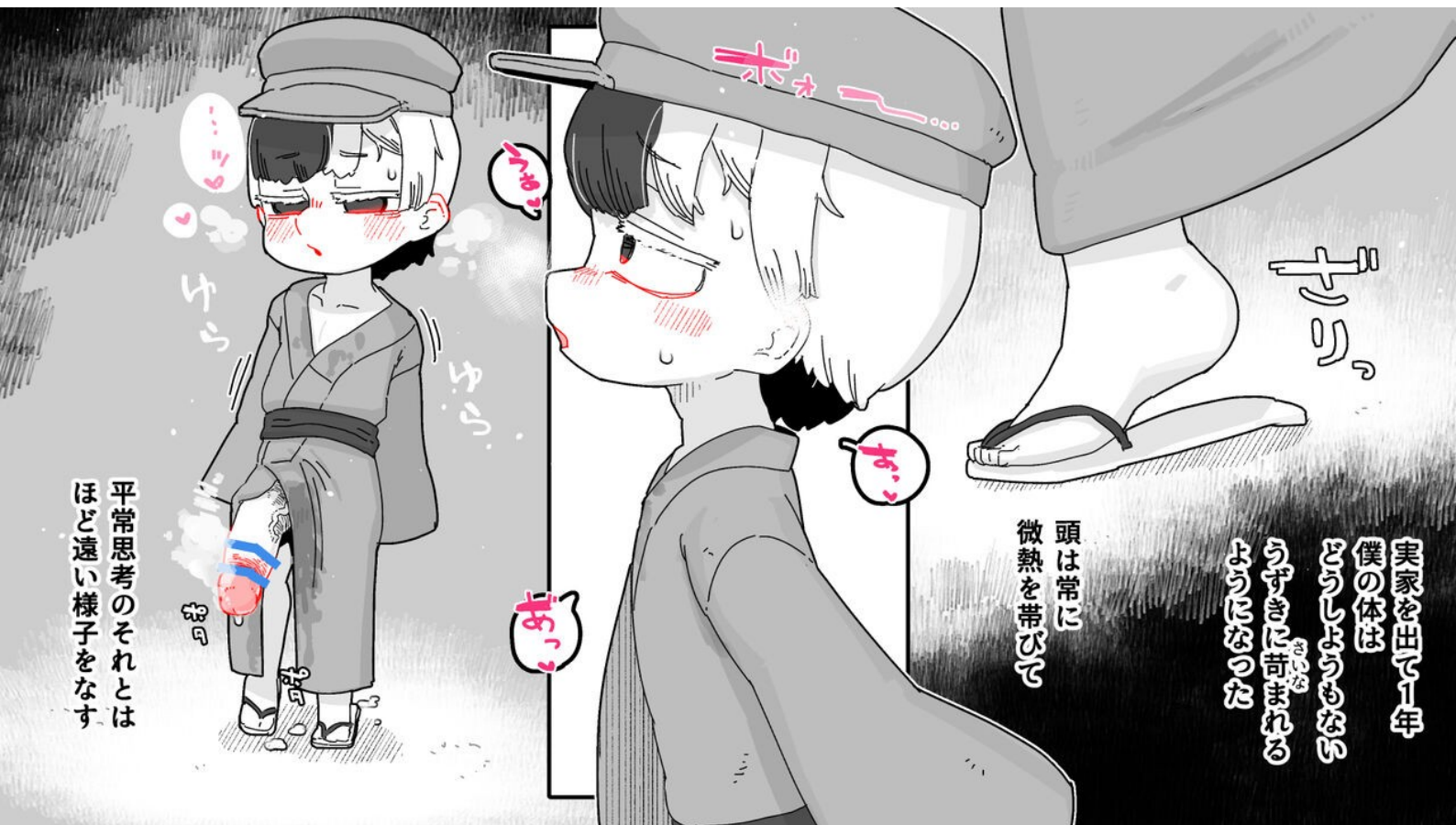
熱いあやが  
なっている

人としての  
モラルを捨てた  
獣のような交尾

2人とも

心からチンポに  
こびるような  
マンコ女になって

そんなわけ  
なら そんな



平常思考のそれとは  
ほど遠い様子をなす

……

けら

お

お

お

お

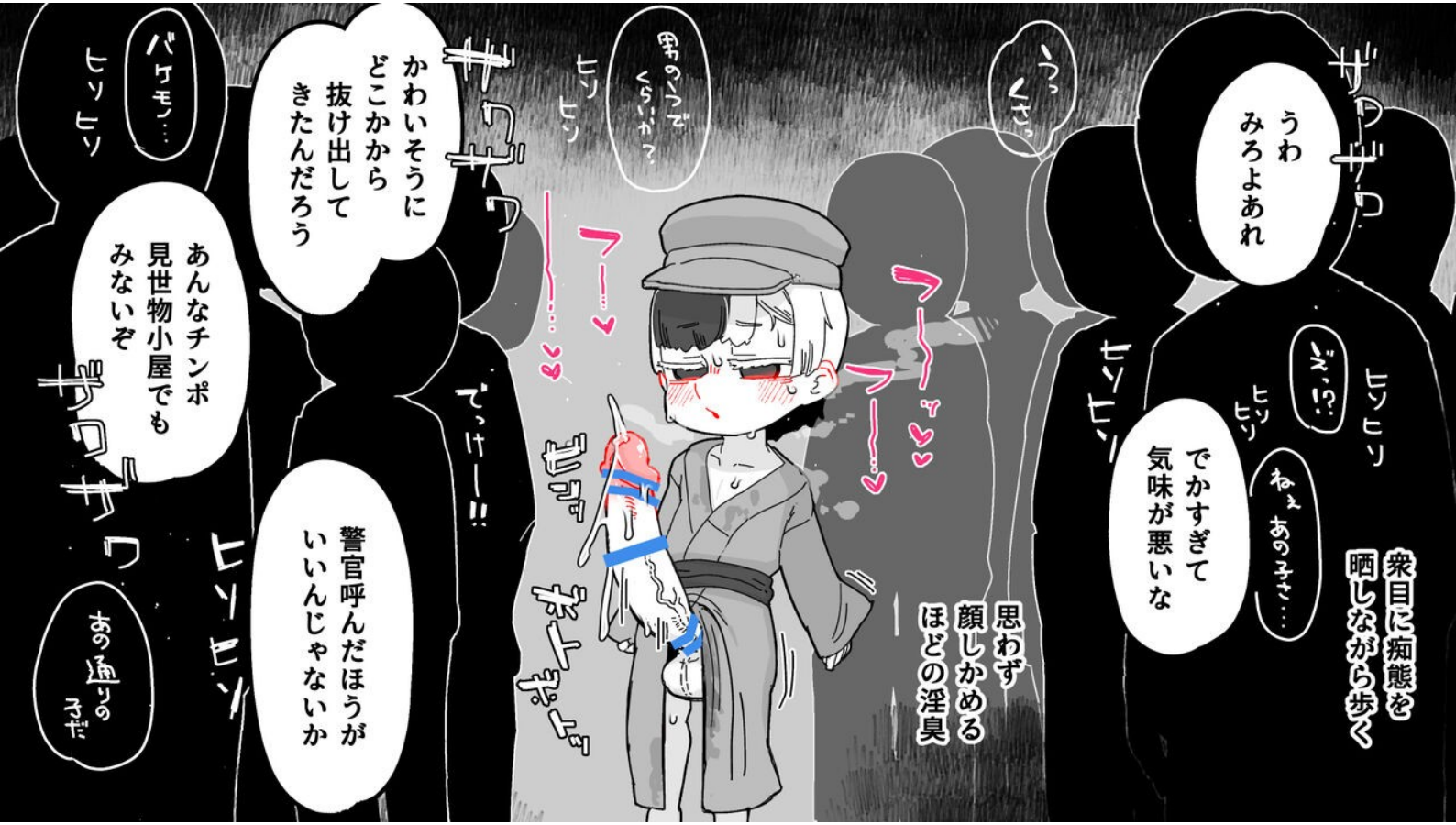
ポォー……

お

けりっ

頭は常に  
微熱を帯びて

実家を出て1年  
僕の体は  
どうしようもなら  
うずきに苛まれる  
ようになった



うわ  
みるよあれ

でかすぎて  
気味が悪いな

衆目に痴態を  
晒しながら歩く

思わず  
顔しかめる  
ほどの淫臭

可愛いそうに  
どこかから  
抜け出して  
きたんだろう

かわいそうに  
どこかから  
抜け出して  
きたんだろう

警官呼んだほうが  
いいんじゃないか

バケモン...

あんなチンポ  
見世物小屋でも  
みないぞ

おのれの  
おれ

可愛い

可愛い

可愛い

可愛い

可愛い

可愛い

可愛い

可愛い

可愛い

可愛い

可愛い

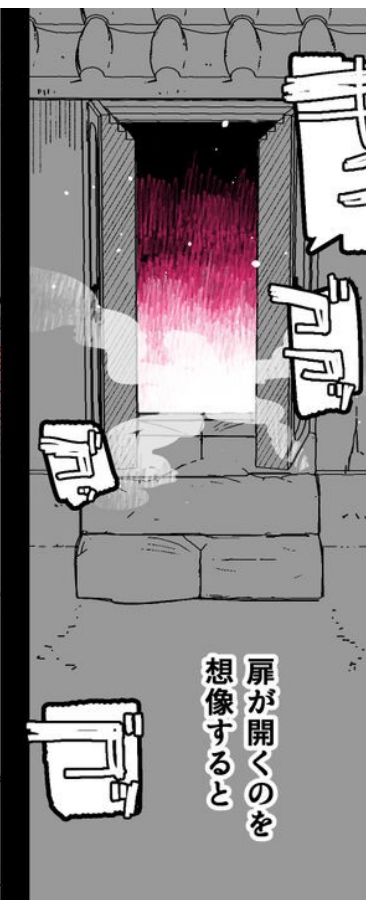
可愛い

可愛い

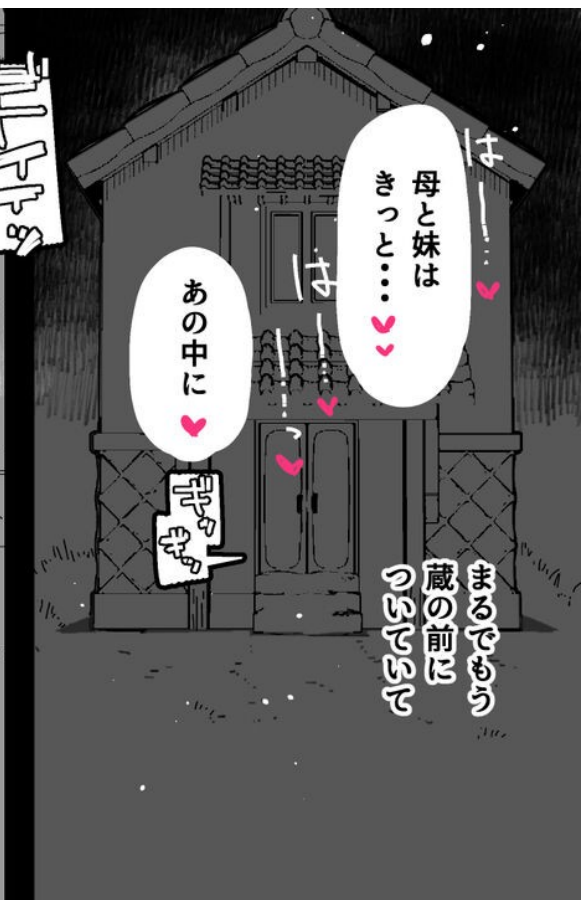


生々しい淫臭が  
香ってくる気がした

あーっ



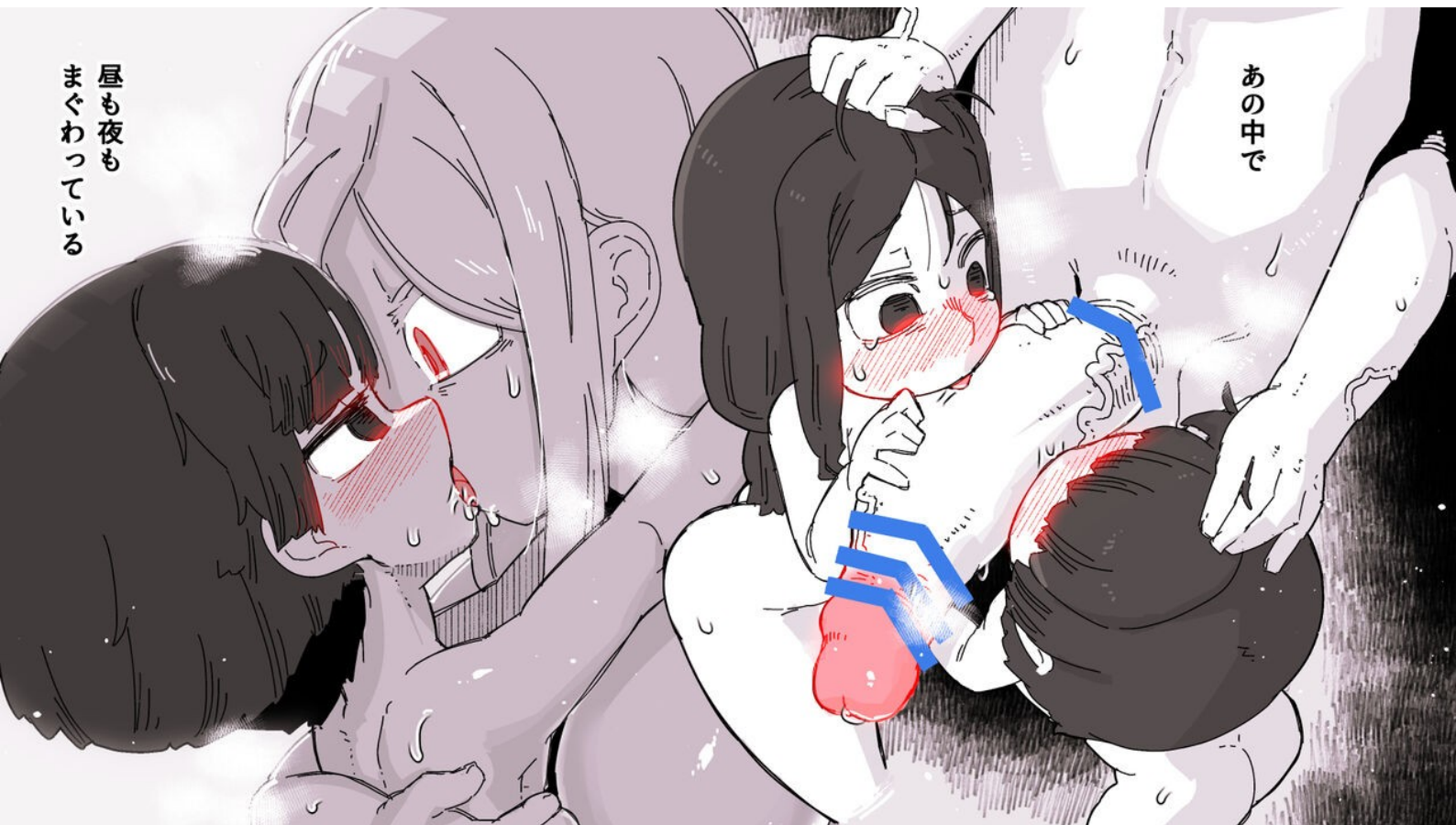
扉が開くのを  
想像すると



母と妹は  
きつと...

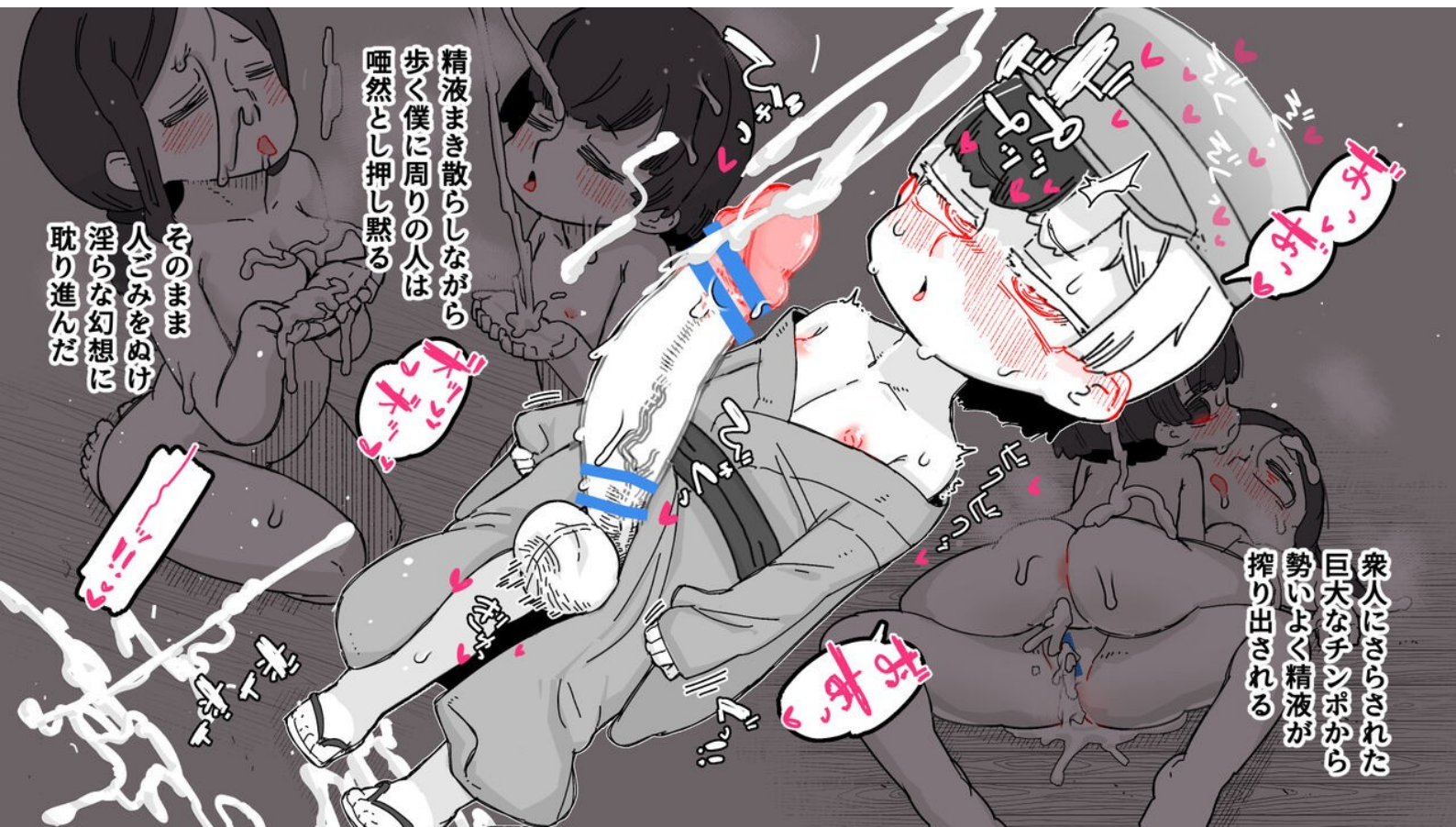
あの中に

まるでもう  
蔵の前に  
のびた



昼も夜も  
まぐわっている

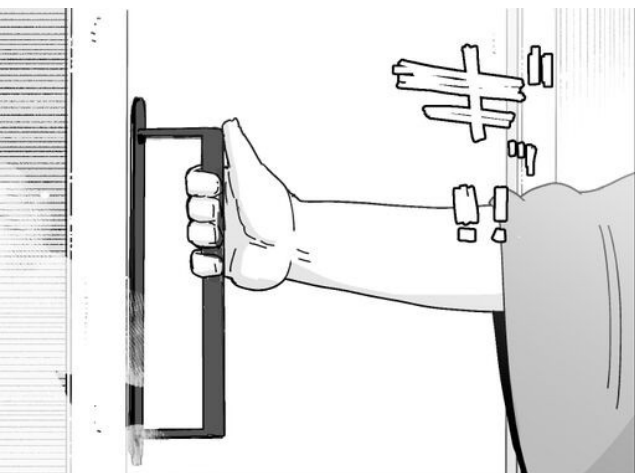
あの中で



精液まき散らしながら  
歩く僕に周りの人は  
啞然とし押し黙る

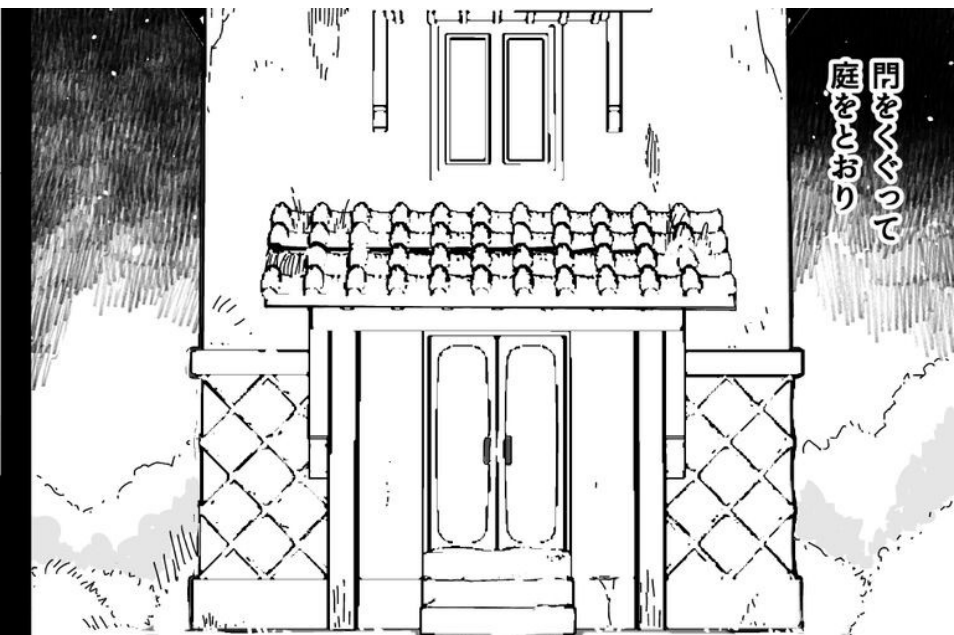
そのまま  
人ごみをぬけ  
淫らな幻想に  
耽り進んだ

衆人にさらされた  
巨大なチンポから  
勢いよく精液が  
搾り出される



ここまで歩いた  
記憶は無いが

扉の重みで  
幻想でない  
とわかる



門をくぐって  
庭をとおる

家の裏手に  
まわる

土蔵は  
変わらず  
あった



おかえりも  
ただいまも無い

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

夢中で  
麻下する

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

カキカキ

押し広げられた臍腑  
首の骨がゴキゴキ軋む

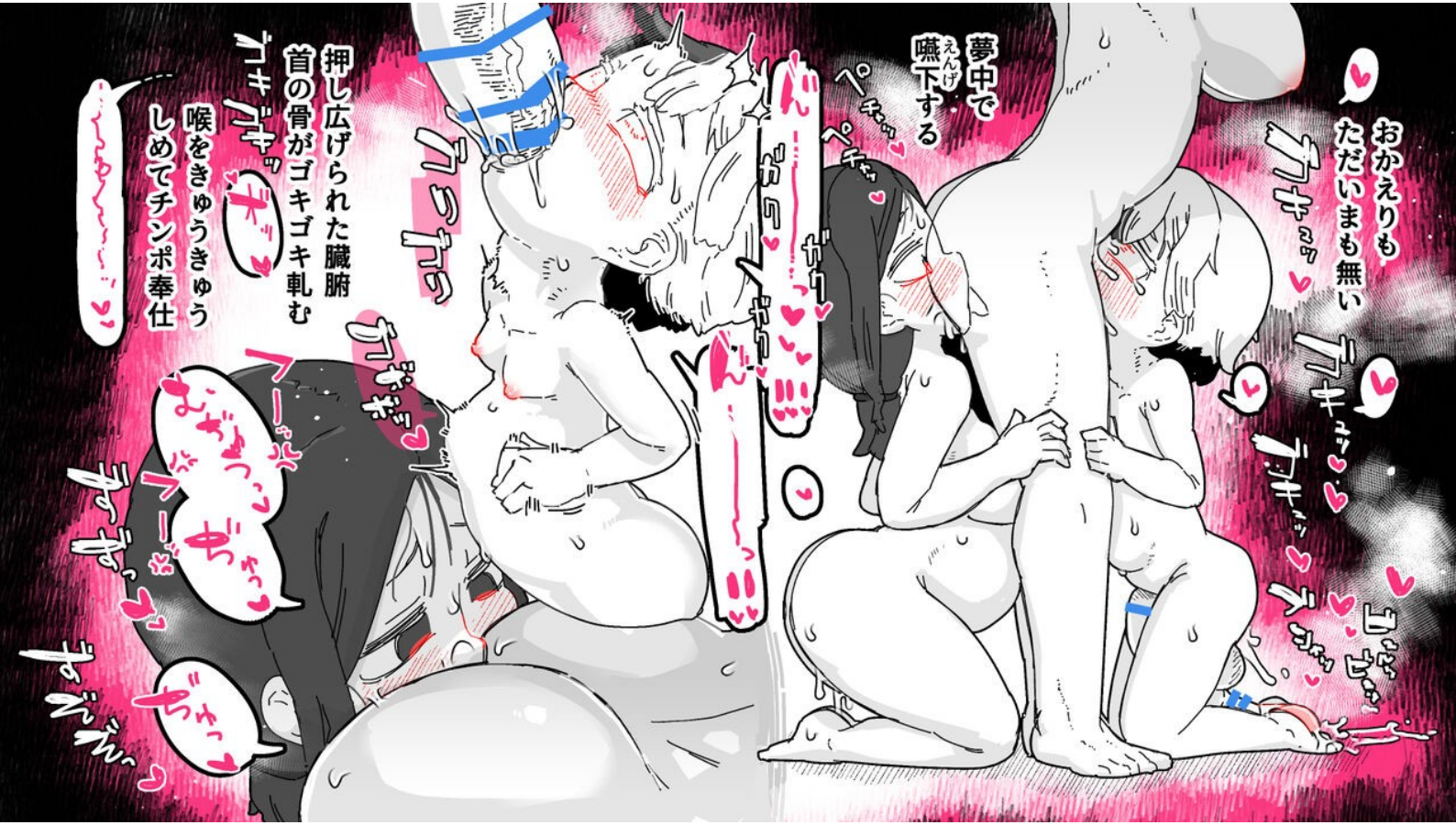
カキカキ

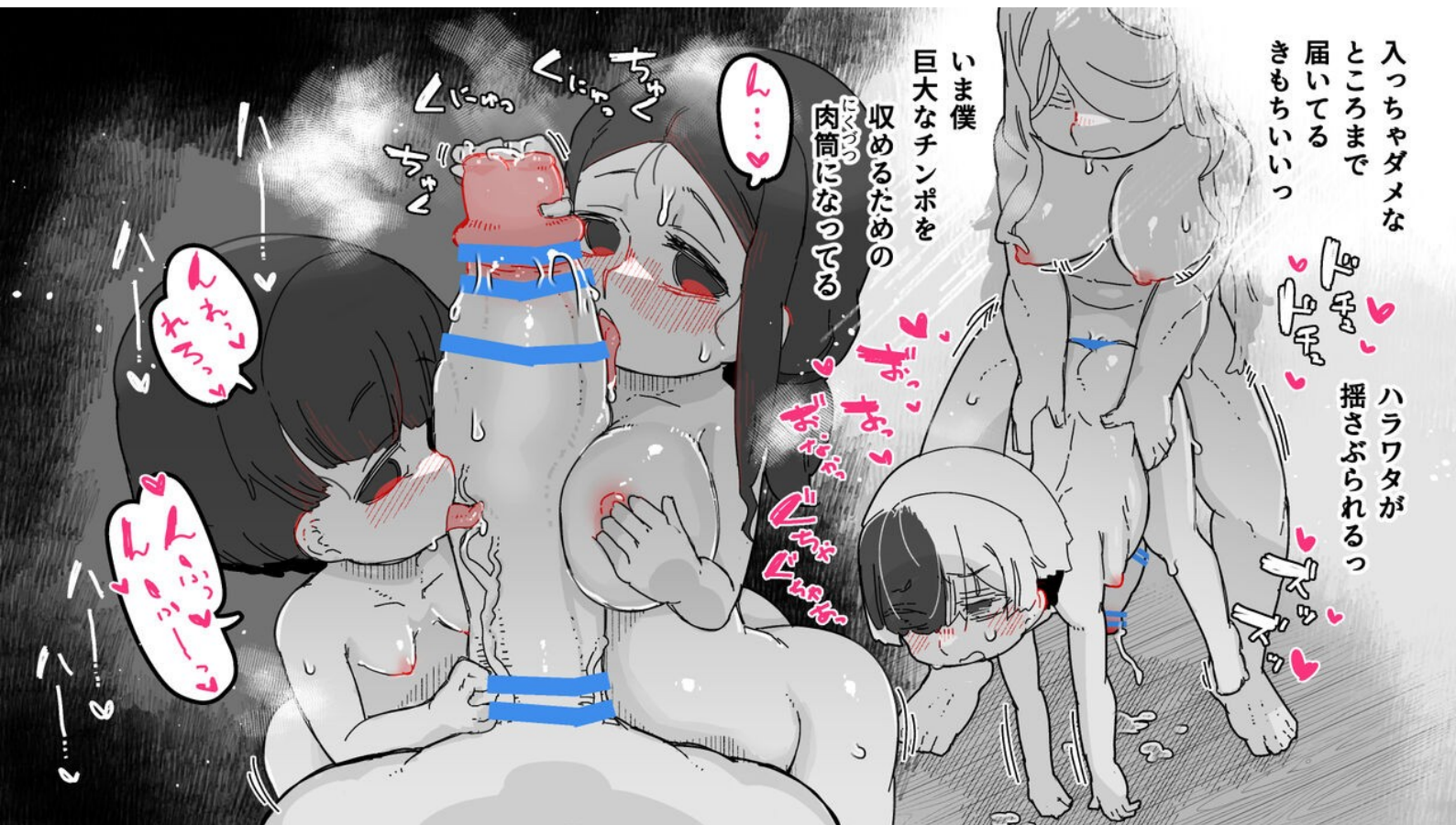
喉をきゆうきゆう  
しめてチンポ奉仕

カキカキ

カキカキ

カキカキ





入っちゃダメな  
ところまで  
届いてる  
きもちいいっ

ハラワタが  
揺さぶられるっ

いま僕  
巨大なチンポを  
収めるための

肉筒になつてる

あんなに  
ちんぽが  
ちんぽが  
ちんぽが

ん……♡

ちんぽ  
く……  
く……  
ちんぽ

ん……♡  
ん……♡

ん……♡  
ん……♡  
ん……♡



父の手記  
俺は、俺の家の持つ  
資産と子種のために  
婿入りさせられたのだ

みじめな弱い  
みじかいチンポの俺を  
妻が愛するはずもない

三人目の子は  
髪が黒い  
どうやら俺の子だ

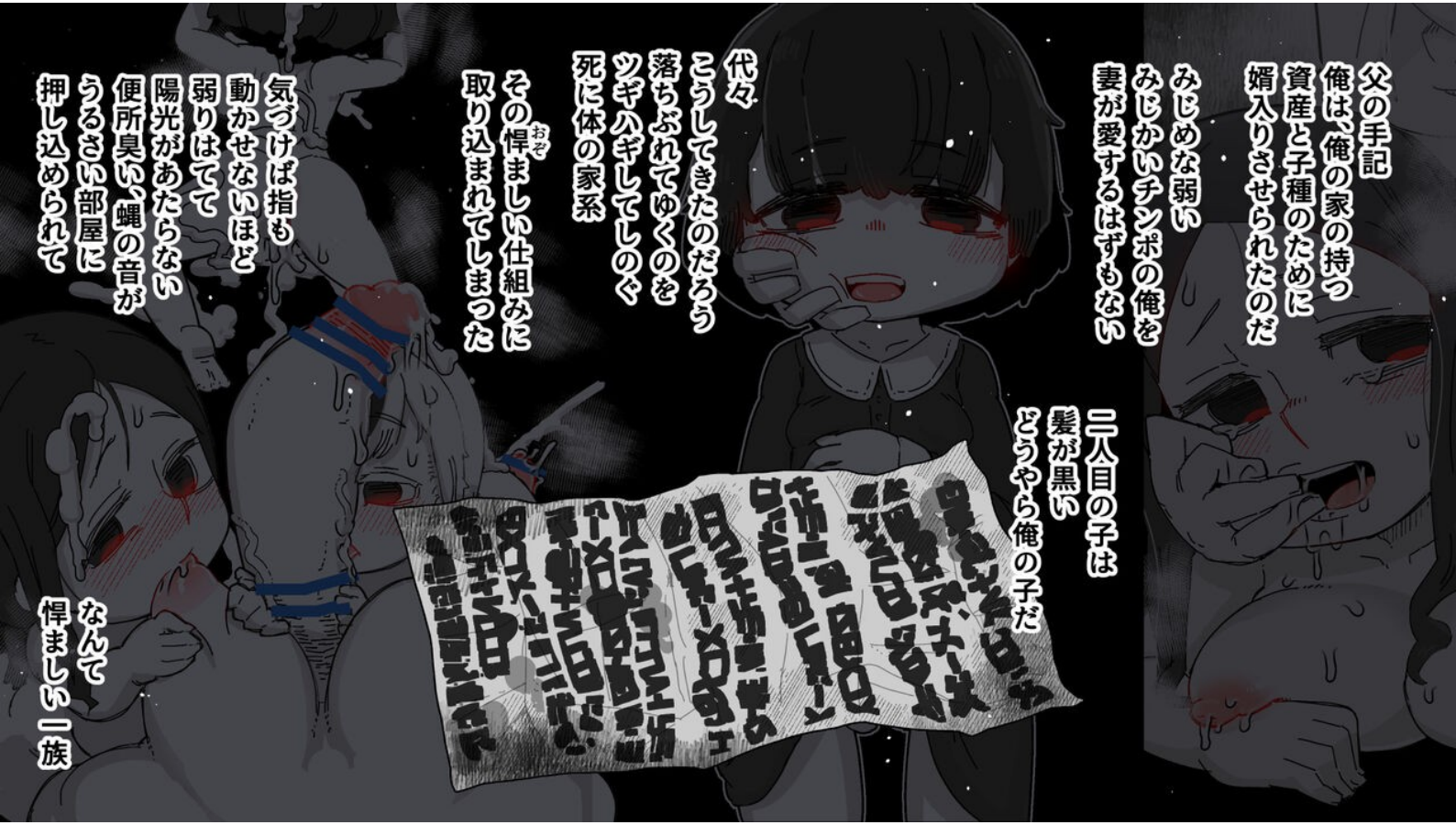
代々  
こうしてきたのだから  
落ちぶれてゆくのを  
ツギハギしてしのぐ  
死に体の家系

その俾まじら仕組みに  
取り込まれてしまった

気づけば指も  
動かせないほど  
弱りはたて  
陽光があたりなら  
便所臭い、蠅の音が  
うるさく部屋に  
押し込められて

なんで  
俾まじら一族

黒髪の子は  
三人目の子だ  
どうやら俺の子だ



最初に生まれた子は  
白髪で気色の悪うほど  
でからチンポがうらやま

俺の子で  
あろうはずがなら

あの蔵にいらる  
化け物と妻の

いずれ  
家を継ぐ立場に  
なるだろう  
あの白髪頭に  
外の世界のことを  
言っできかせた

うまくすれば  
家をでてらん  
かもしれなら

こんな血筋は  
とぎれればいら  
とぎれればいら

ハエの音が  
うるさい

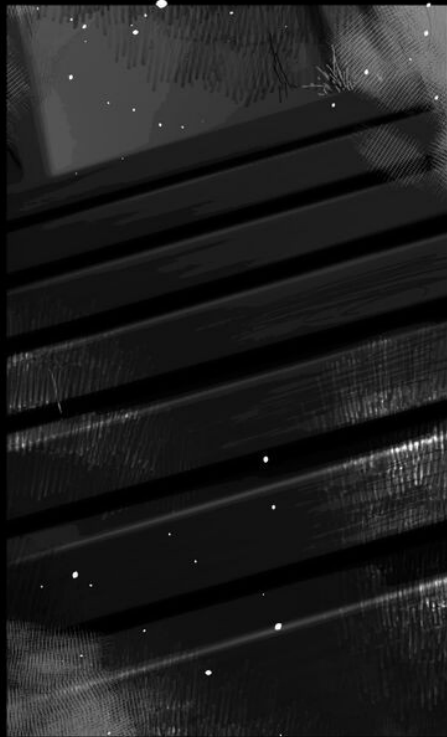
手記は誰にも読まれることは無く、  
読者(あなた)のみが内容を知っています。



最後に仕えていた老婆が  
屋敷を去るとき勝手に  
家主の判子と  
権利書をもちだし、  
金を借りるときの  
<sup>てんぎ</sup>抵当にしたように、  
家も土地もすでに  
他人のものらしい

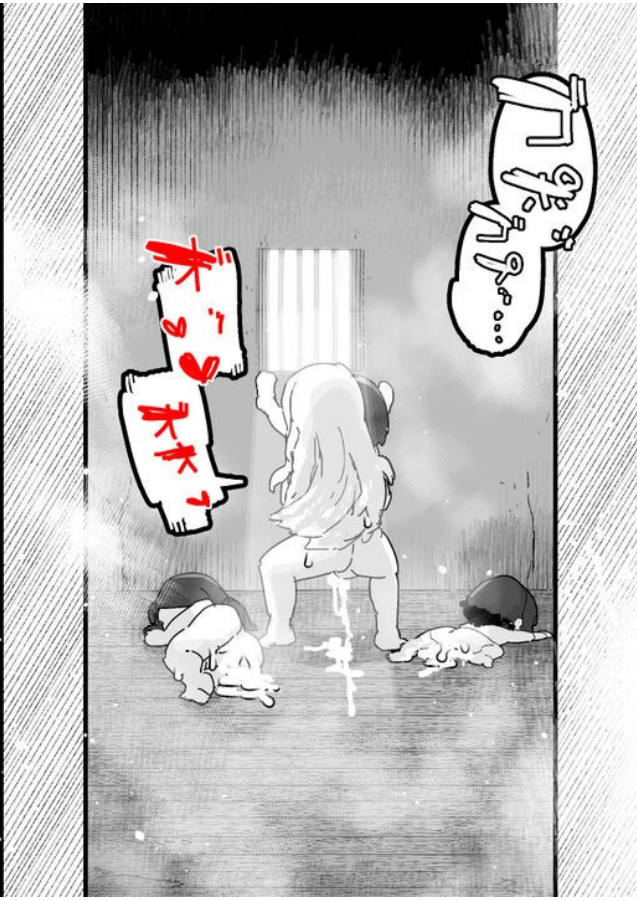
それでも田舎の、ボロの、  
不気味な屋敷に  
買い手はつかないまま  
屋敷は数十年後も  
<sup>お</sup>住しくぼつたと立って来た

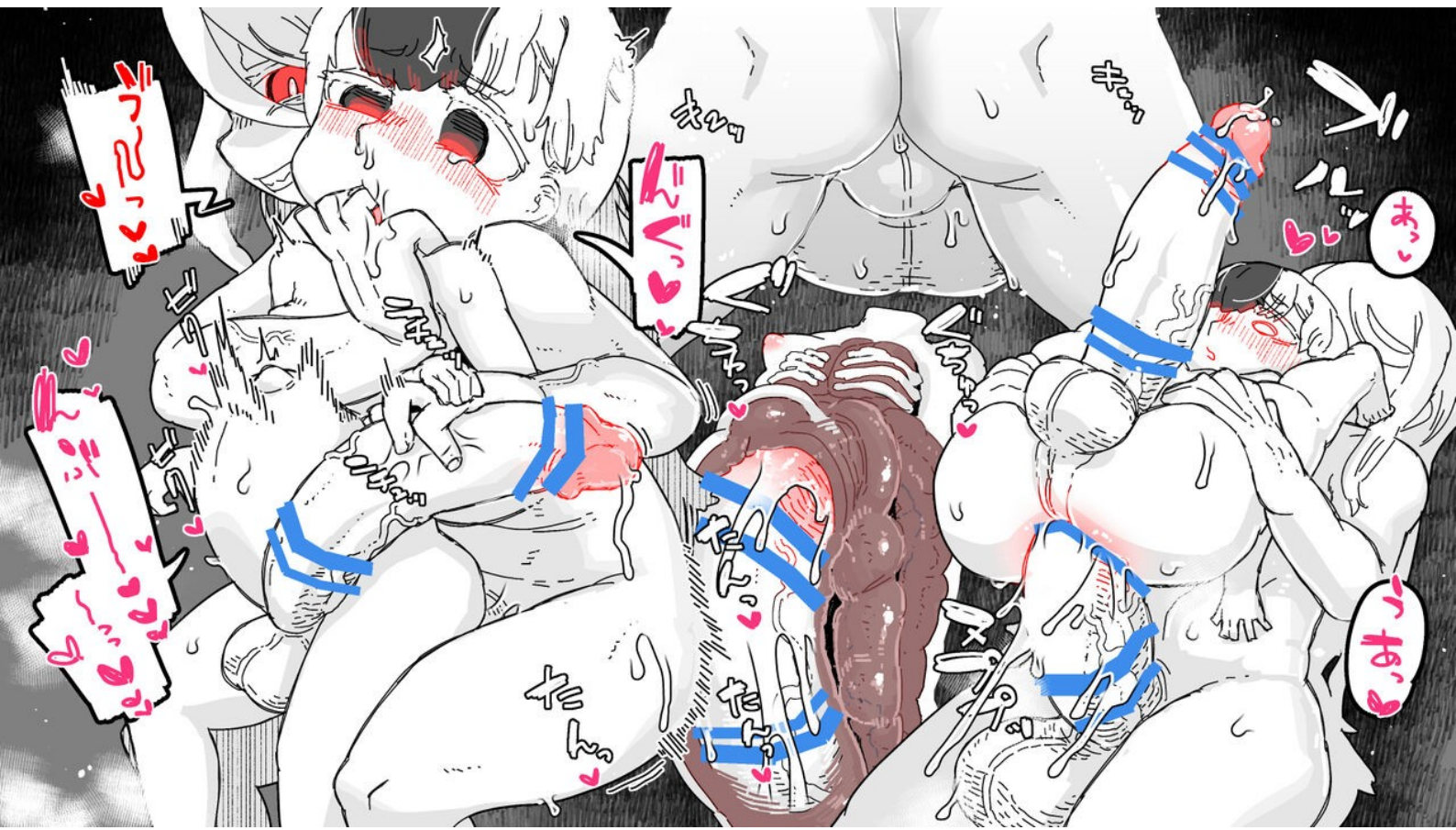


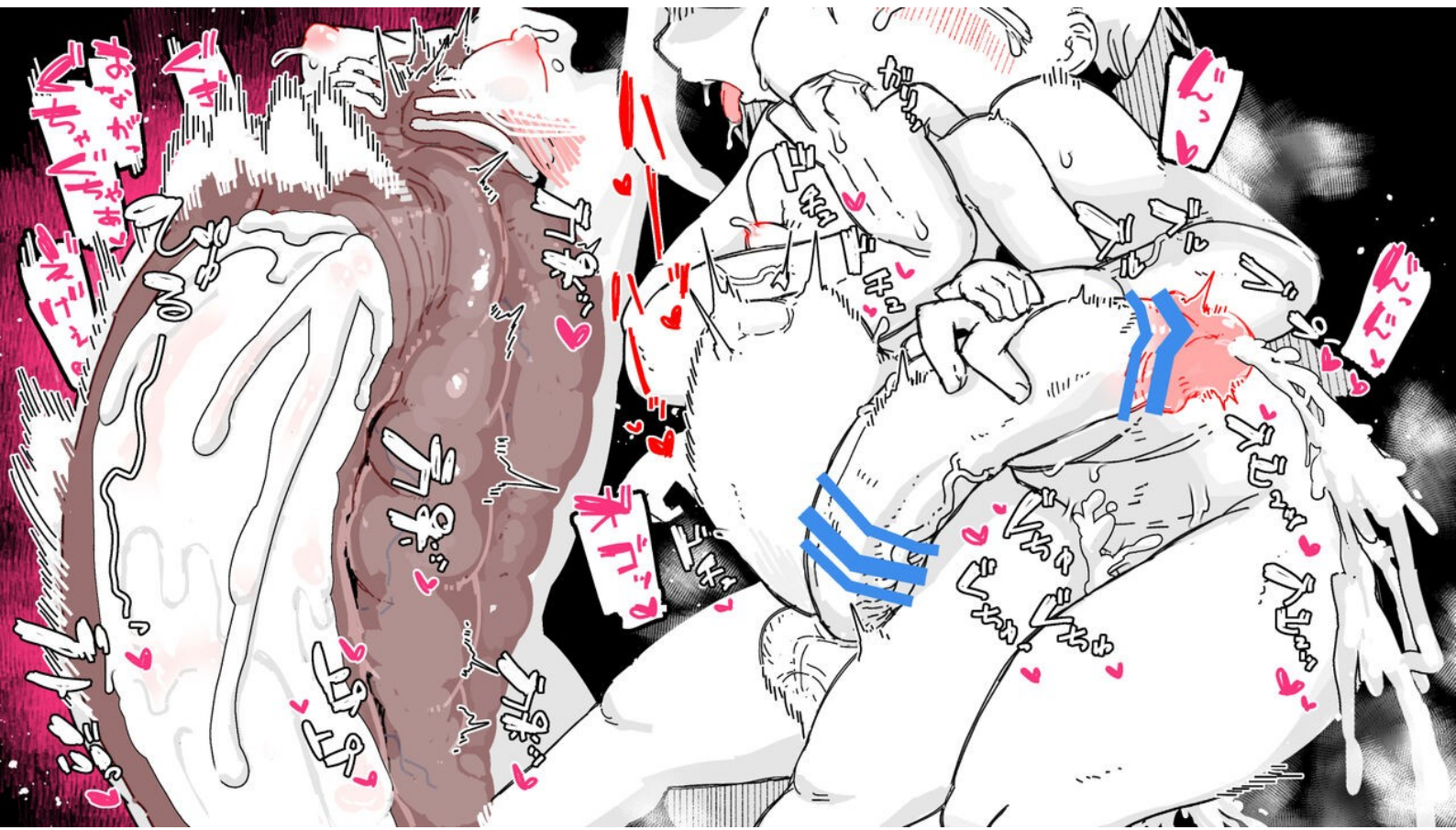


長い年月  
雨風でいたんだ  
屋根や土壁

開いたままの  
扉から聞こえる  
何かを打ち付ける  
ような水音











よく伸びるのよ  
わたくしの穴

ねえ  
あにさま

これなら  
もっとはやくに

元服まで  
母子の交わりは  
禁じられて  
いたのだけど

してあげて  
よかったかしら

あなたが  
急に家をでる  
なんて言うから  
心配したのよ

...

びん

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ

たっ



ひっ  
ひっ  
ひっ  
ほんただっ  
小さい穴が

ほんただっ  
小さい穴が

よく伸びる

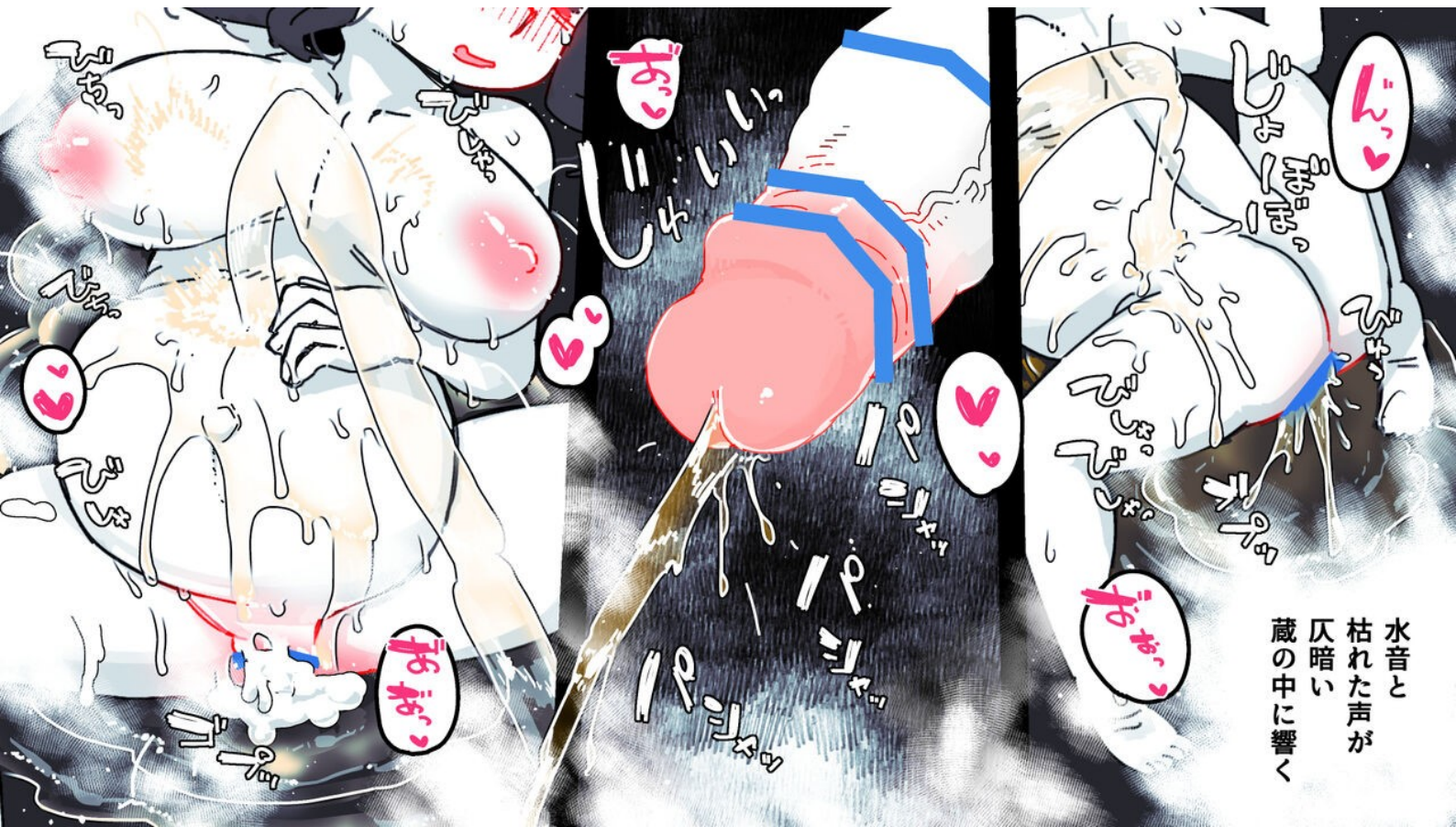
お  
お  
お

突き入れると  
にゅぷと  
肉が吸い付く

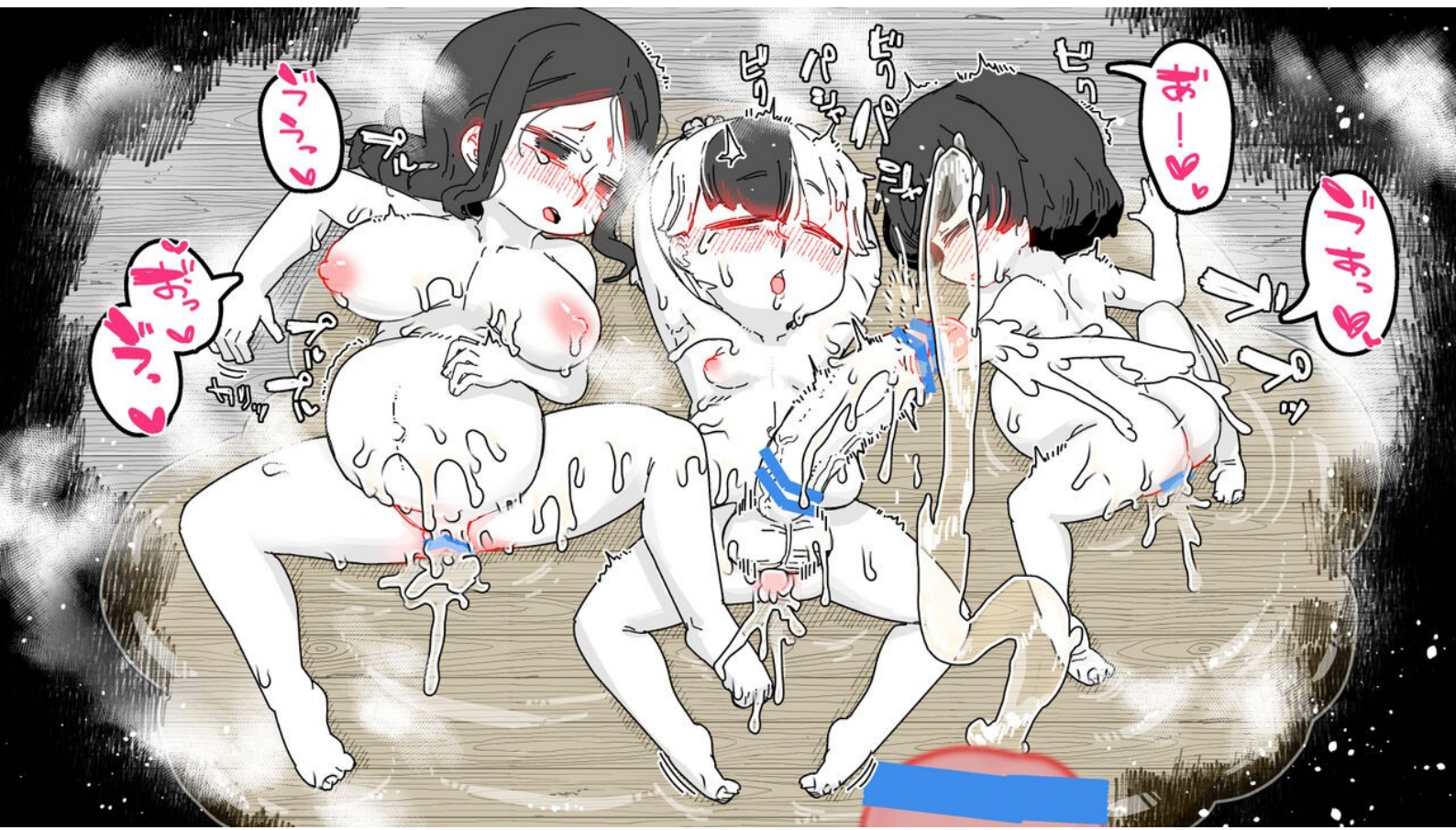
手紙どおりの  
良い穴だった







水音と  
枯れた声が  
仄暗い  
蔵の中に響く





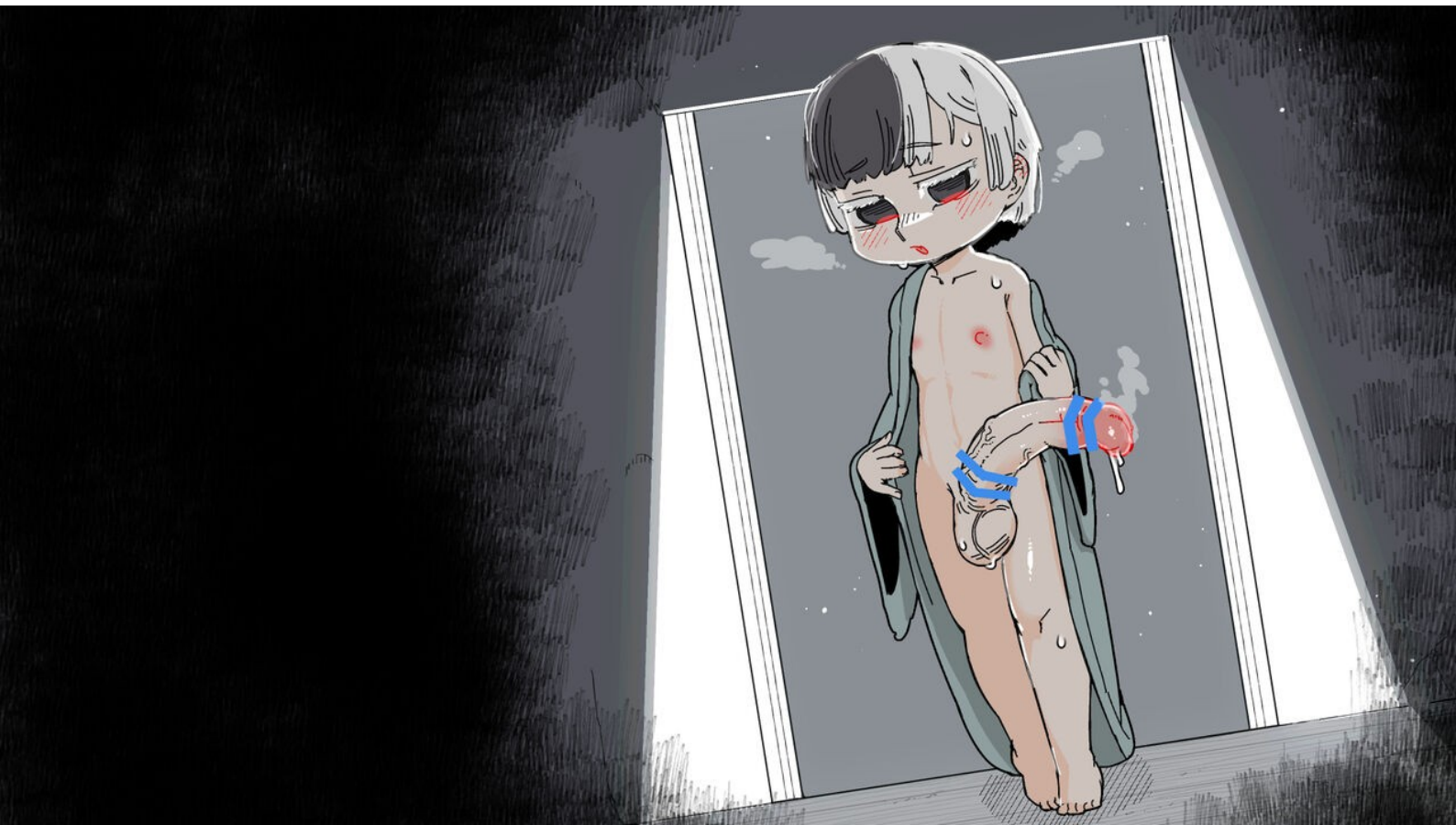
蔵の中は  
すえた淫臭で  
満ちていて

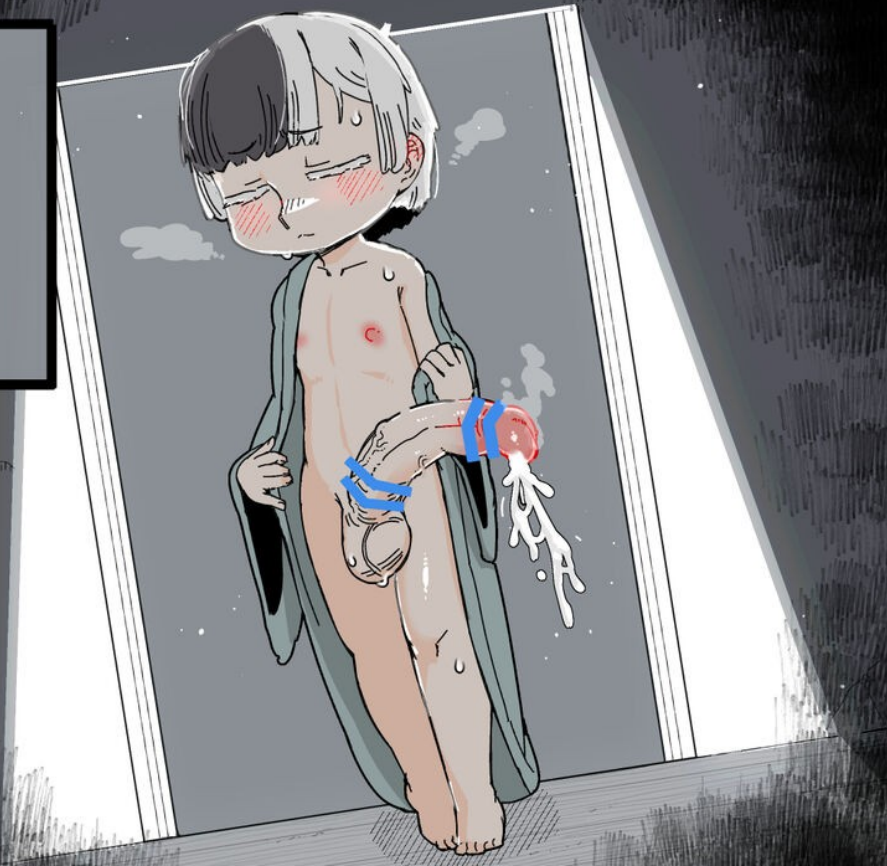
もや  
霏がかかるほど  
ニオイが濃い

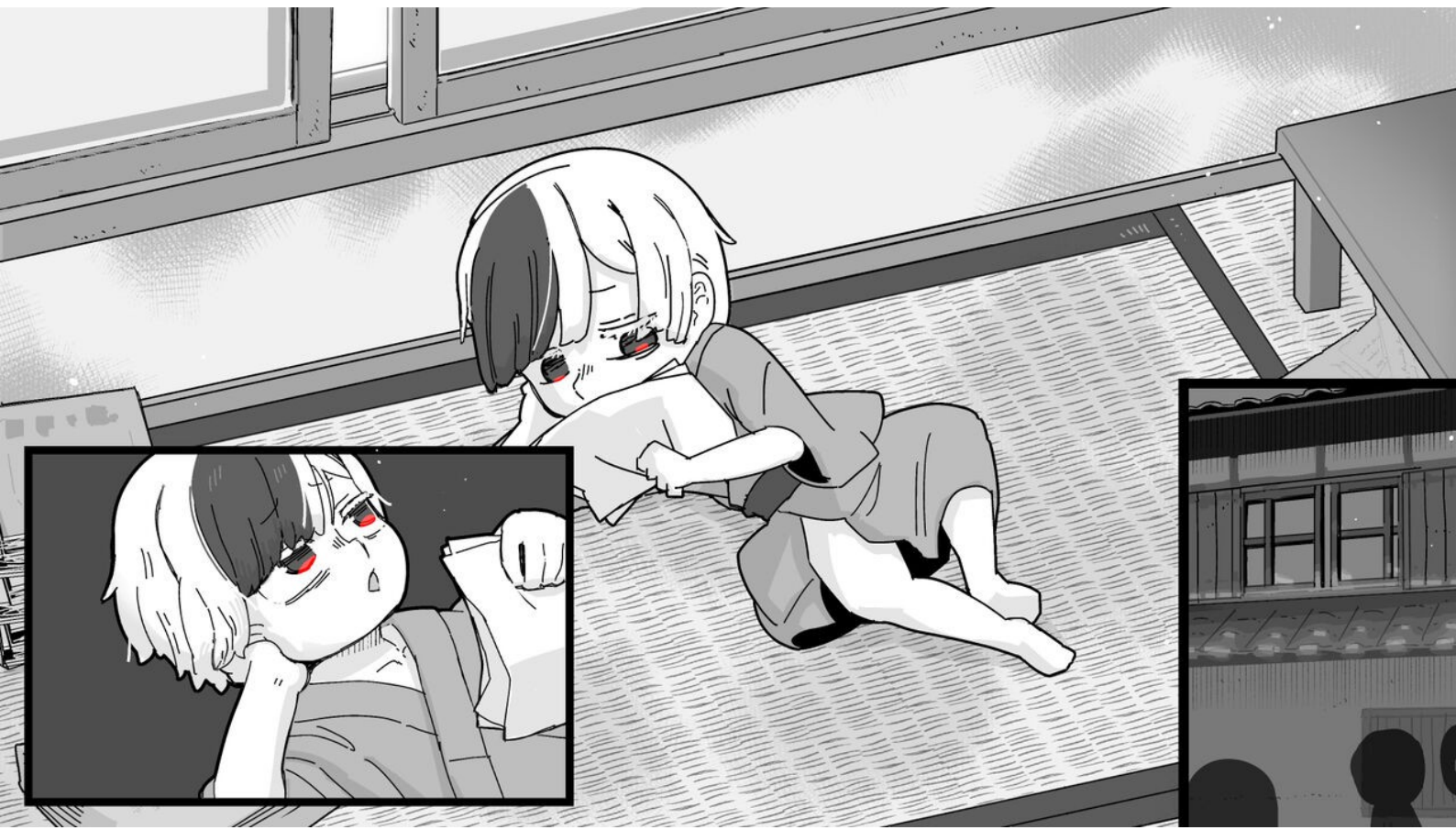
ああ  
なんてニオイ  
なんだ...

そう思いつつ  
僕は深く息を  
吸いこんだ

おわり

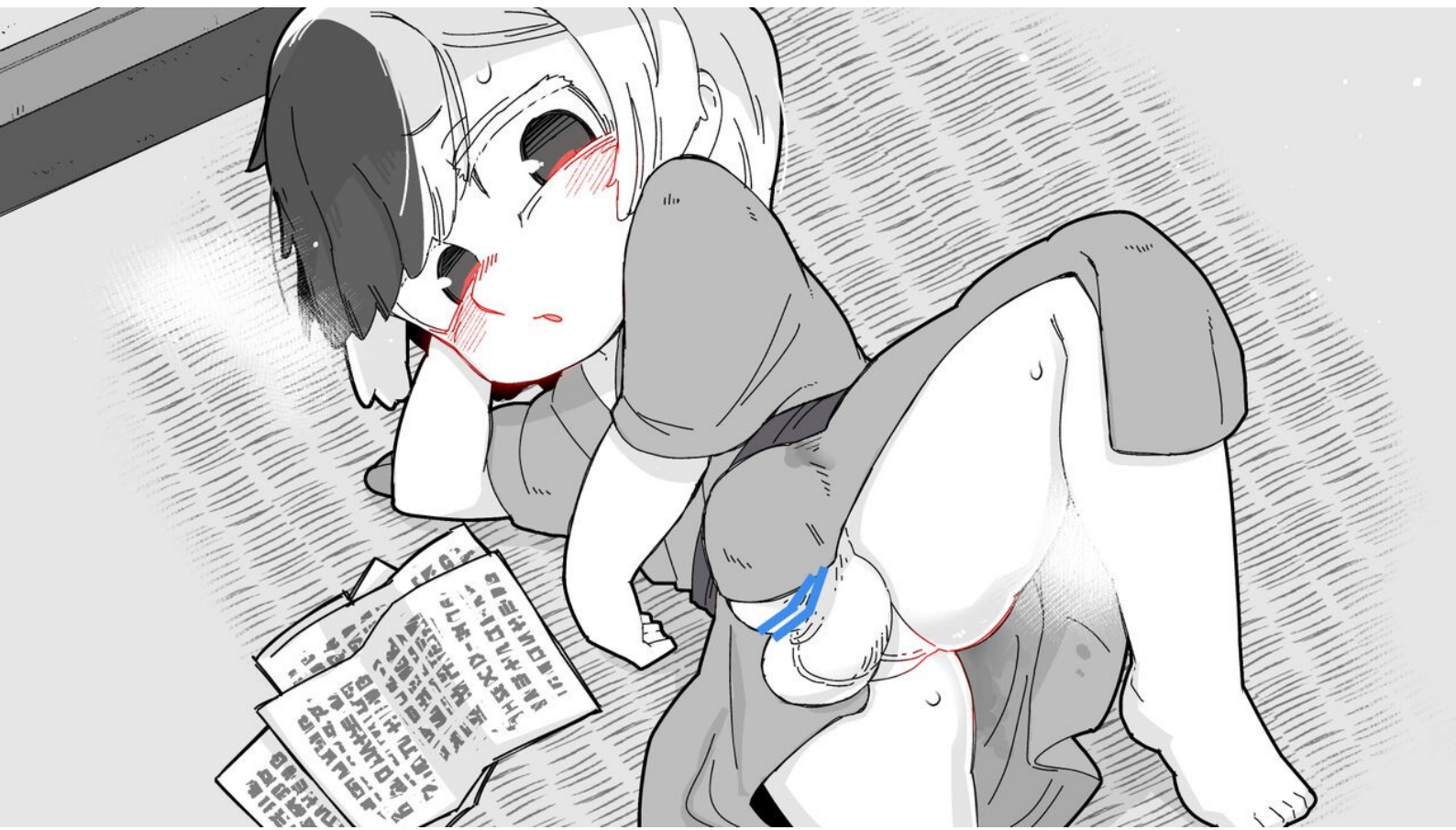






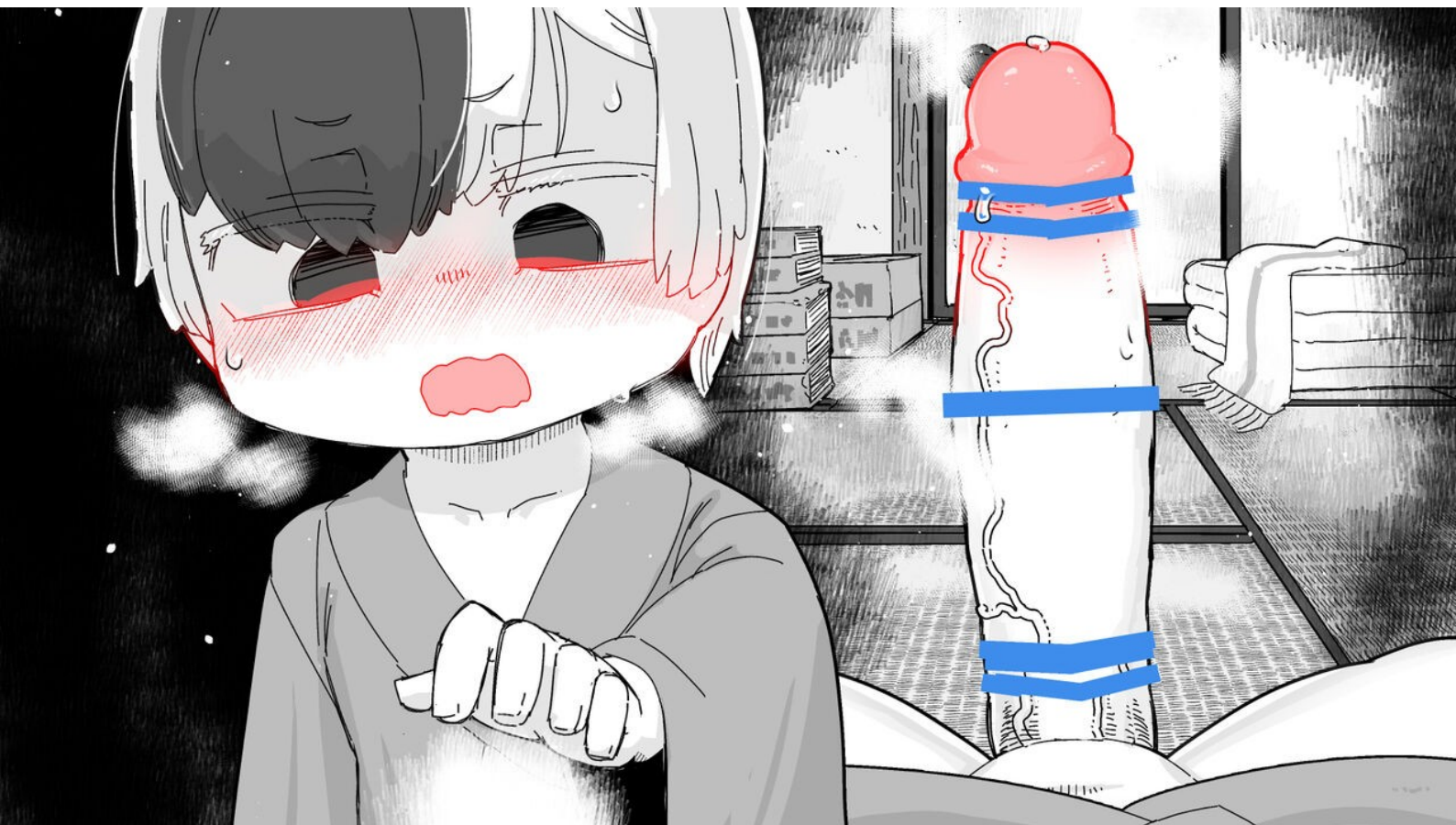


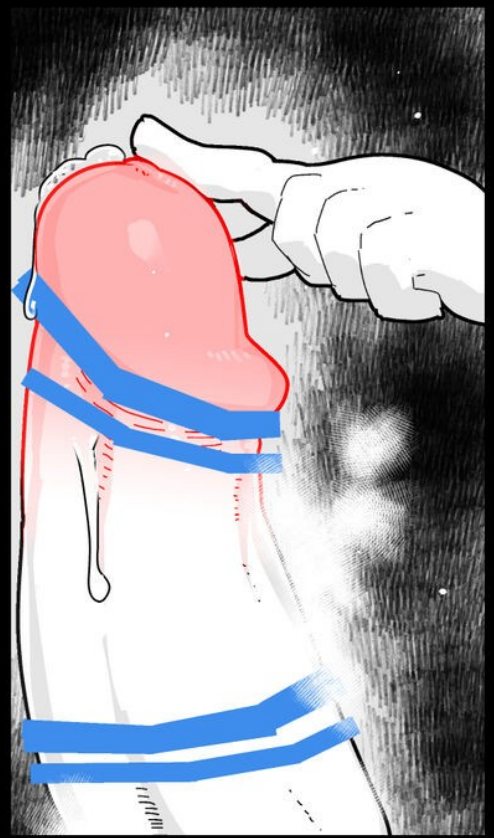
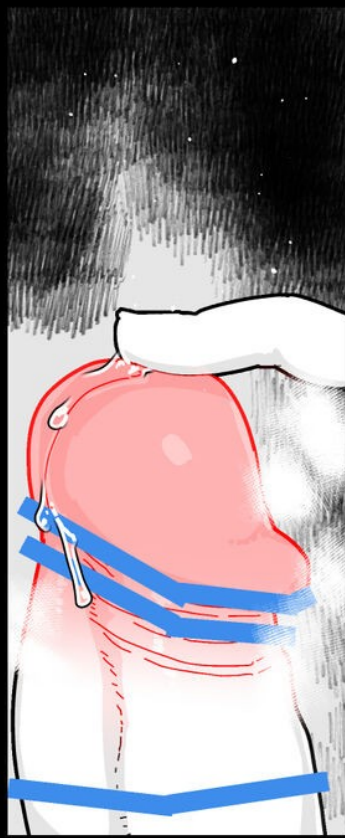
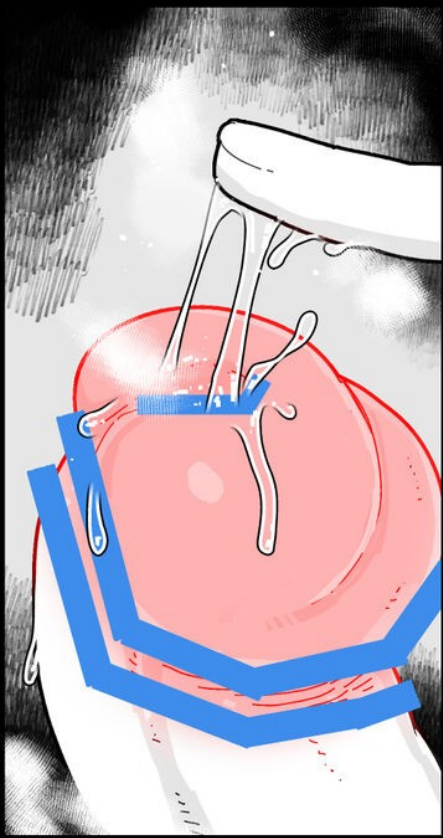


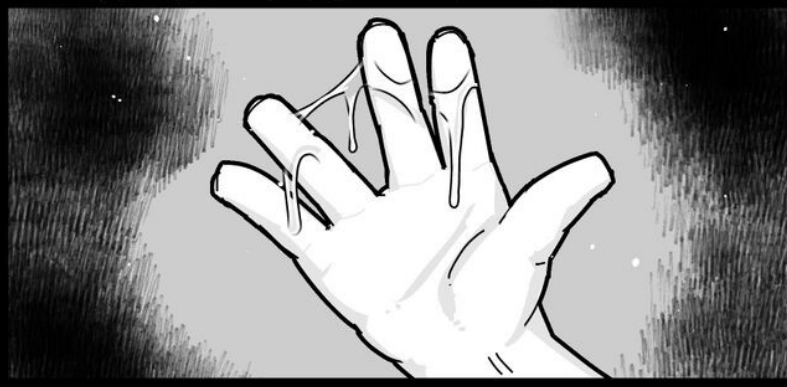
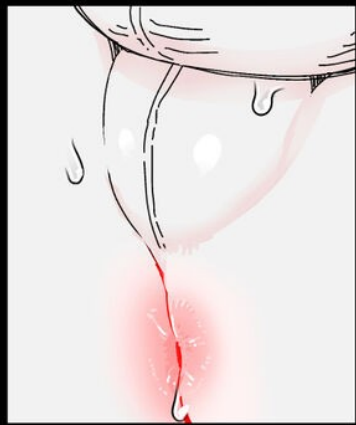
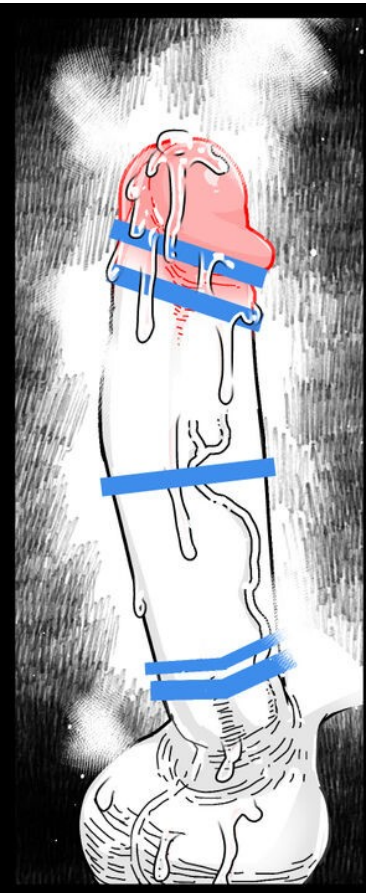




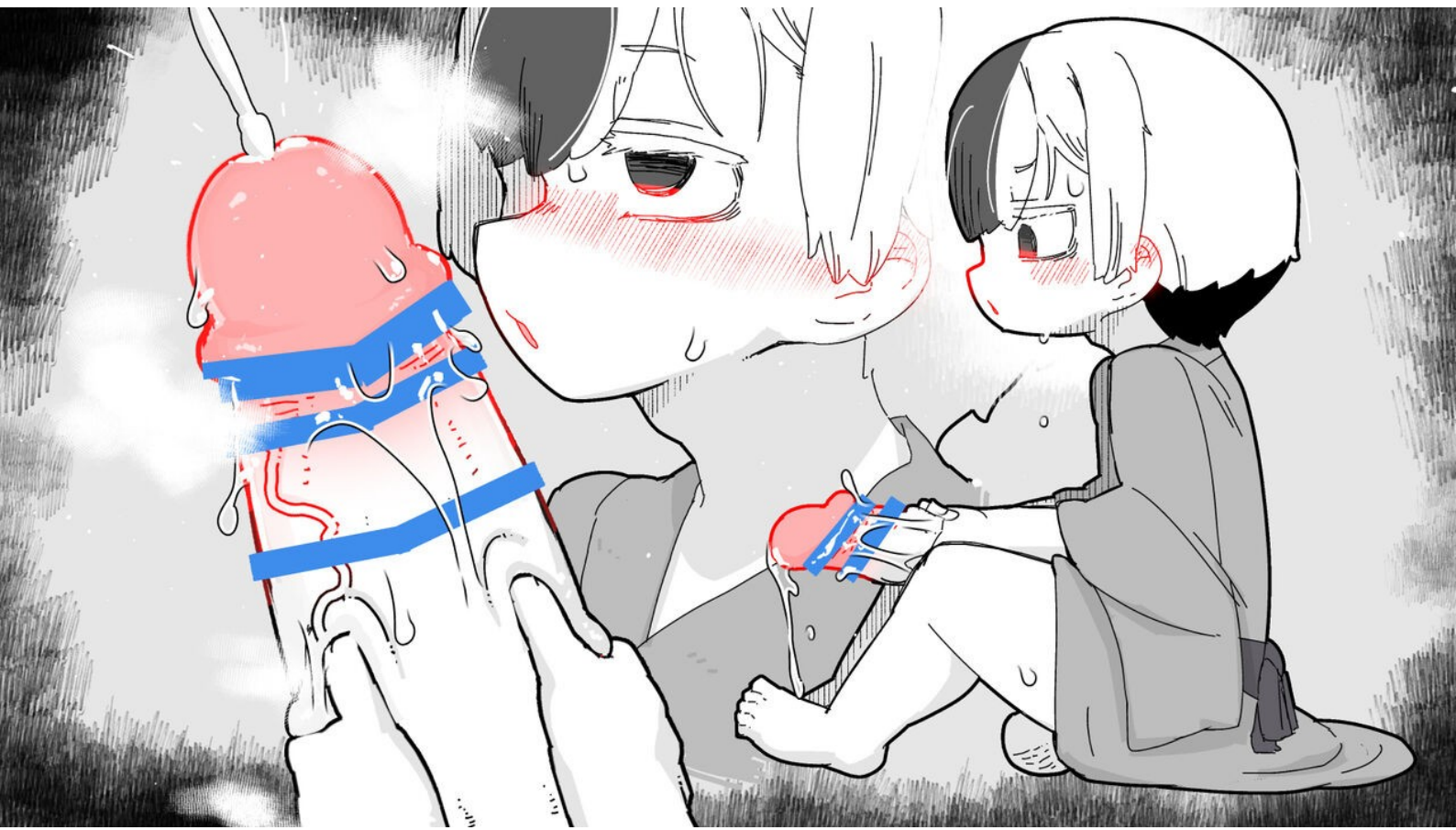




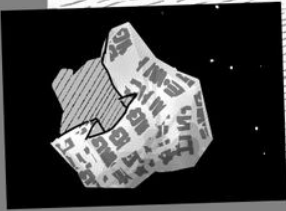




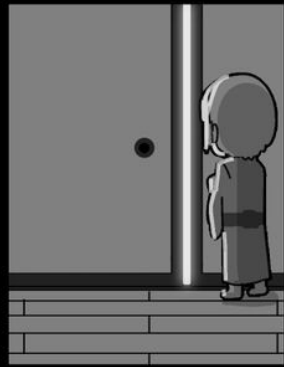
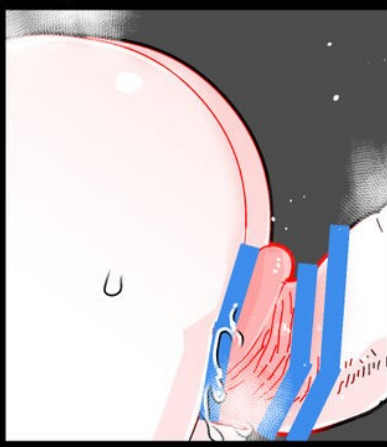




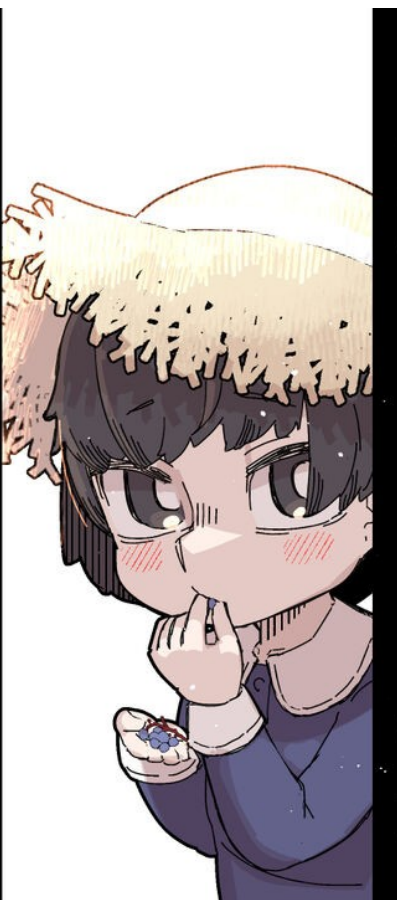






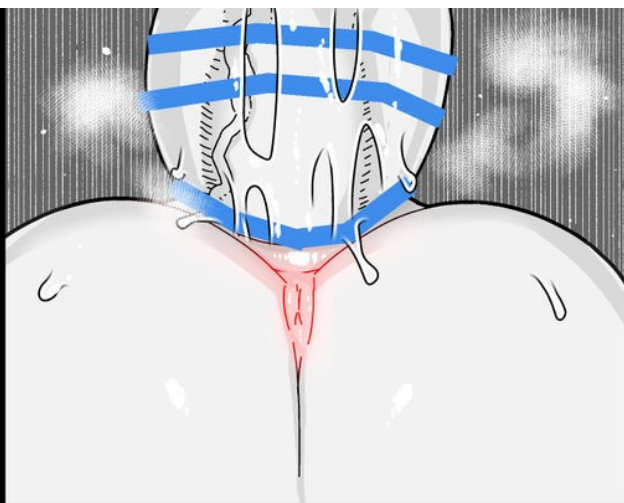






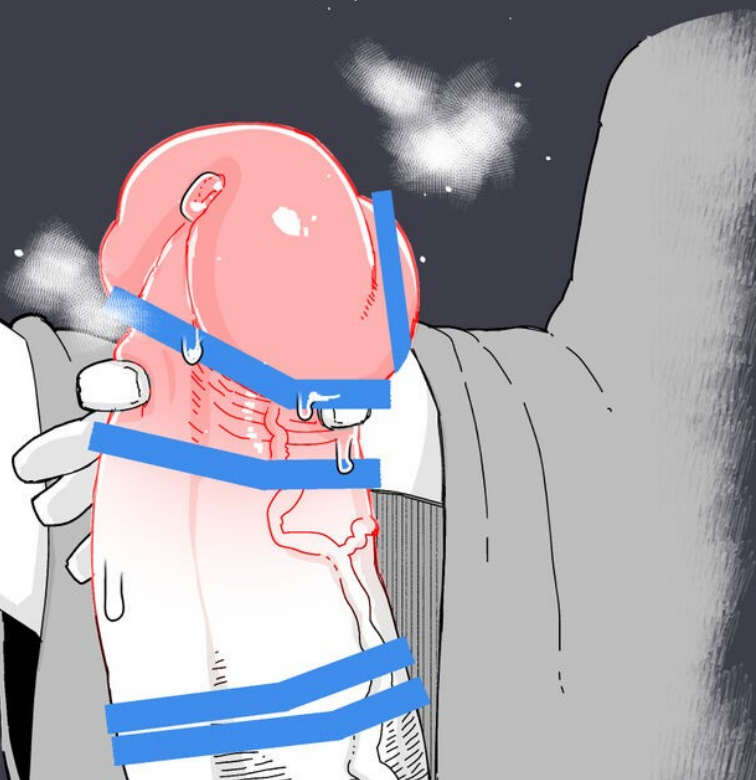
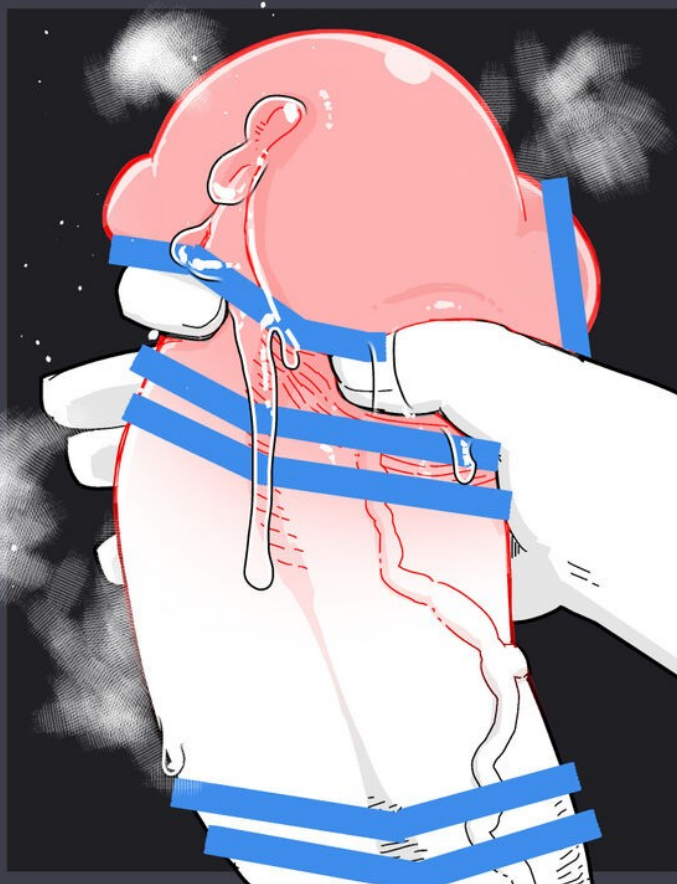








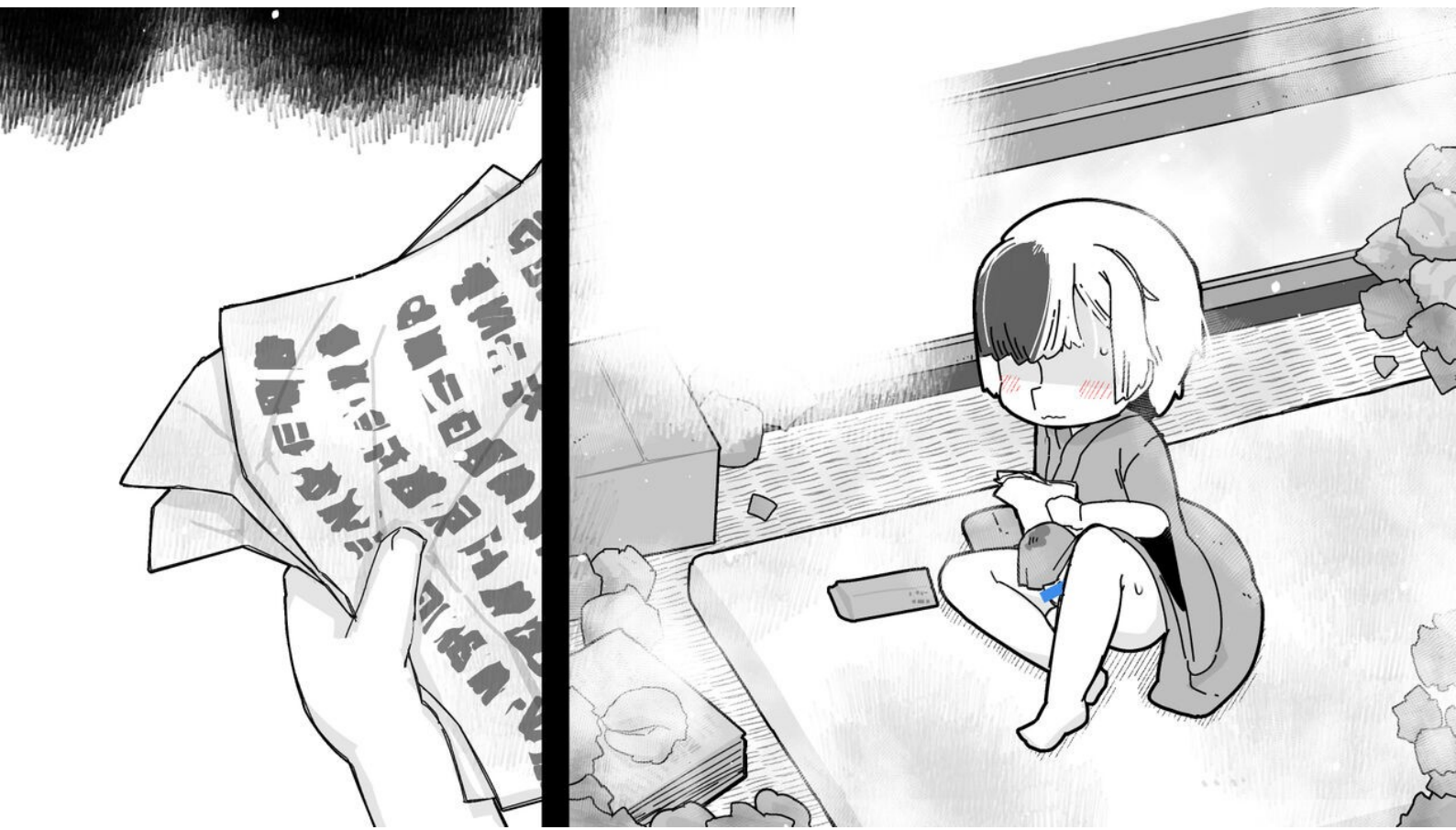


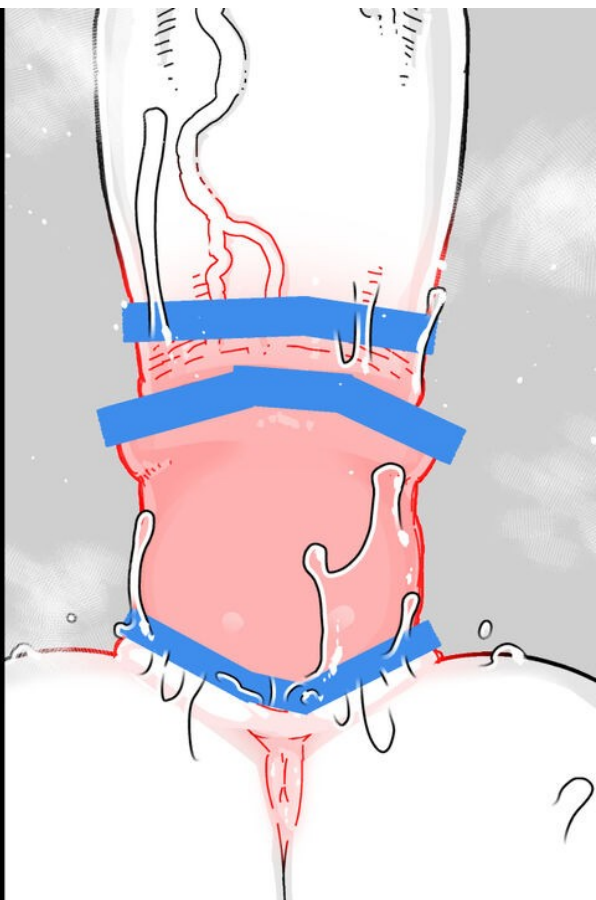






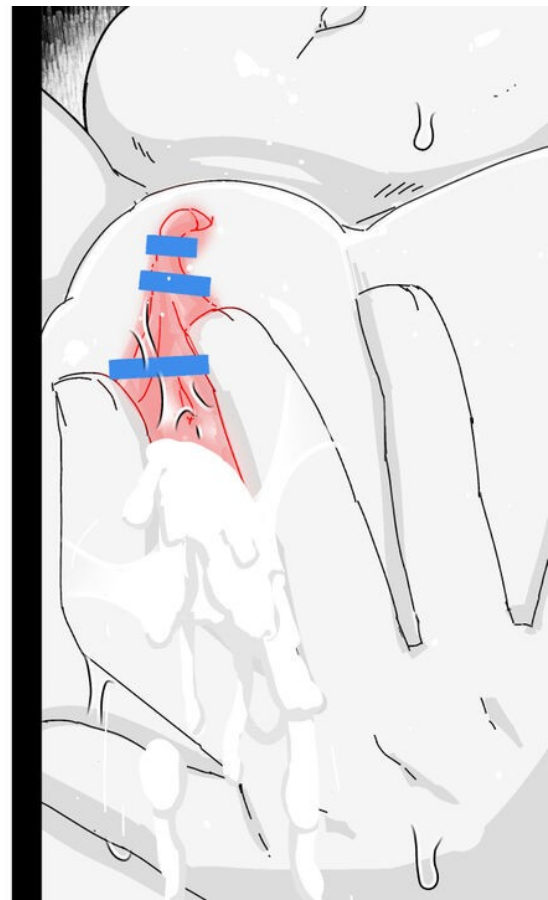


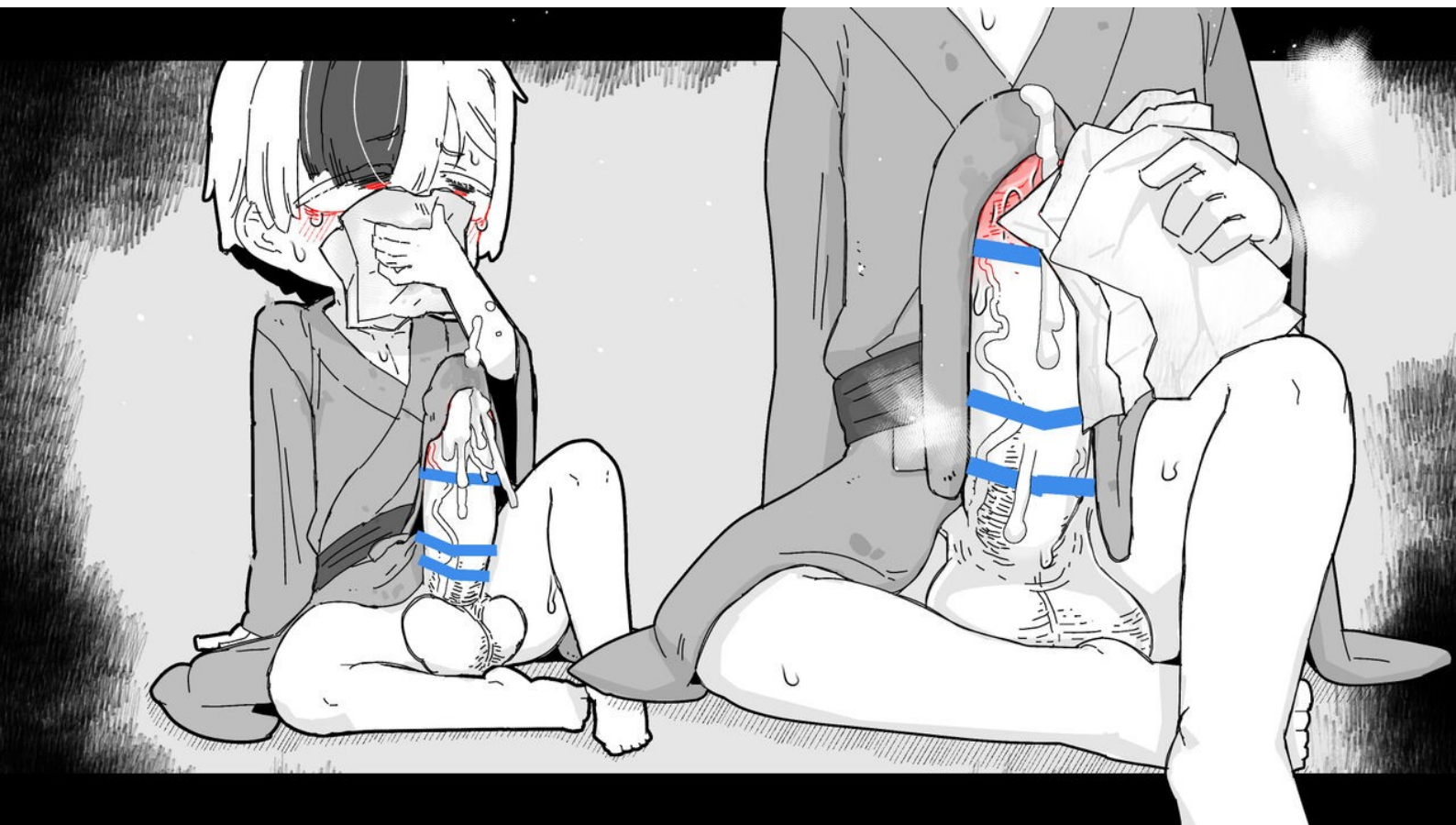


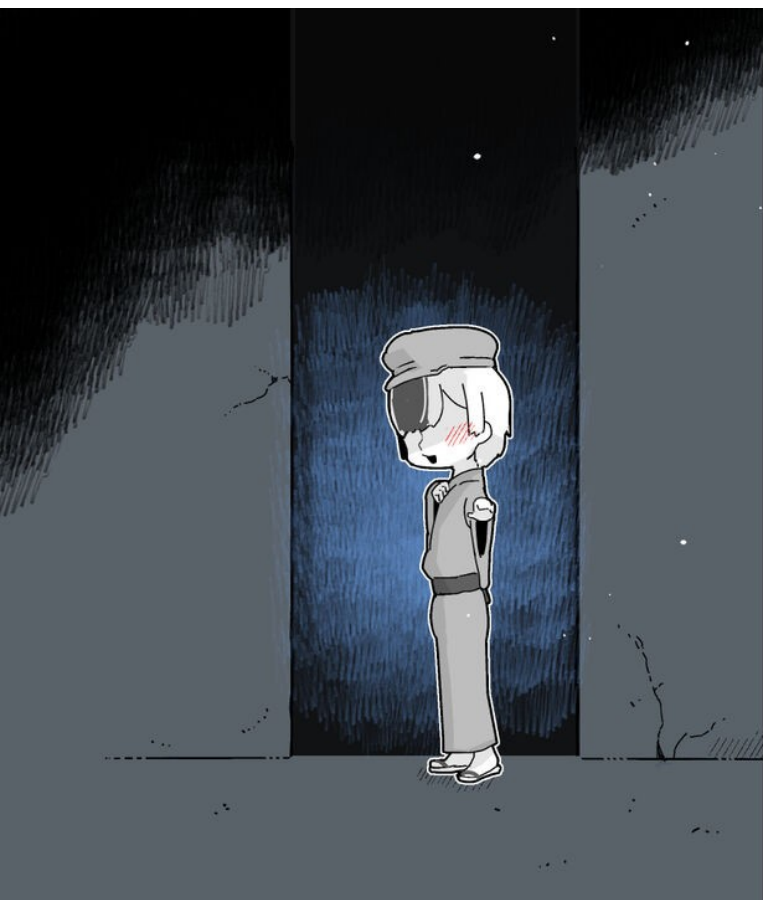


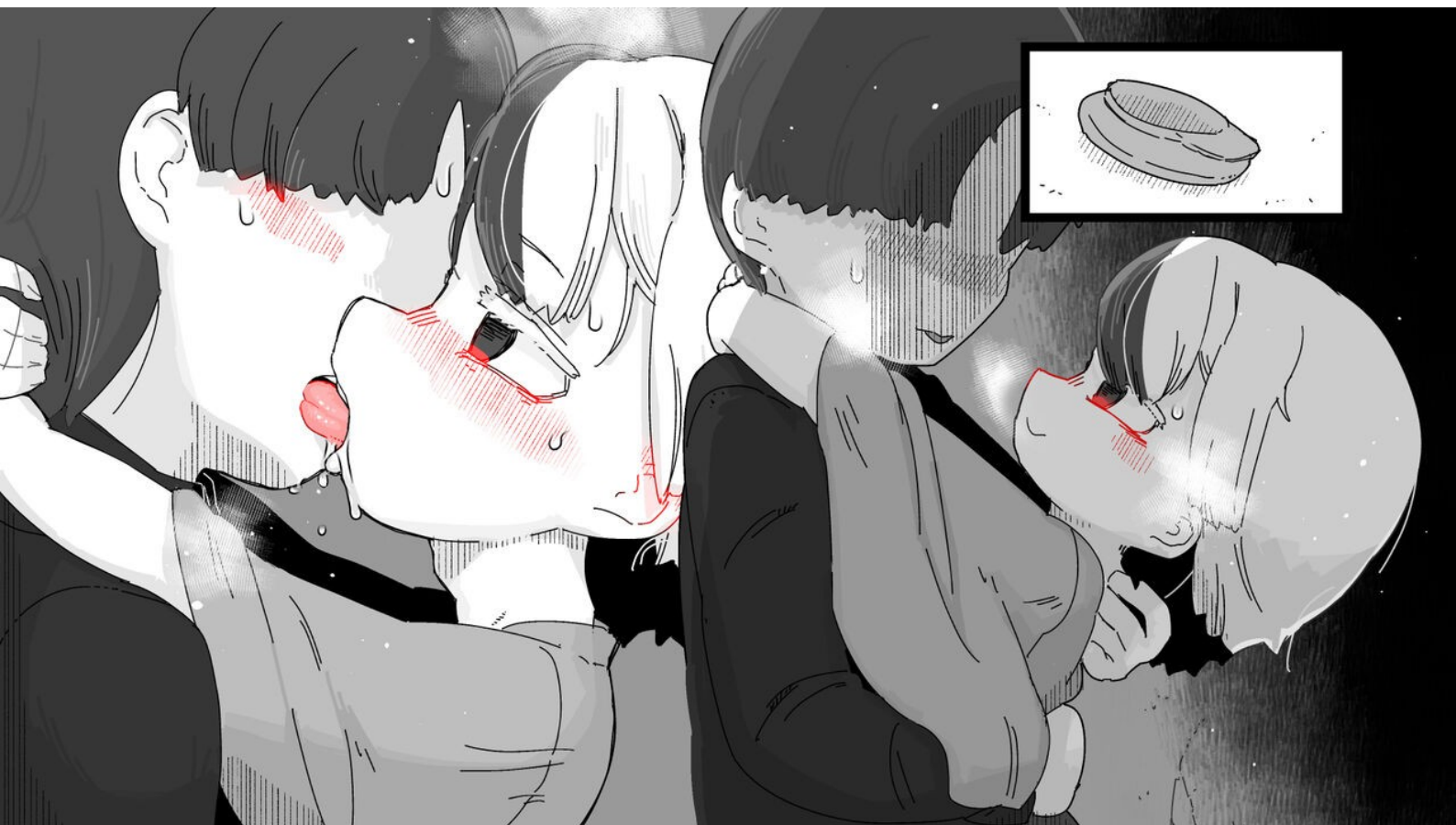


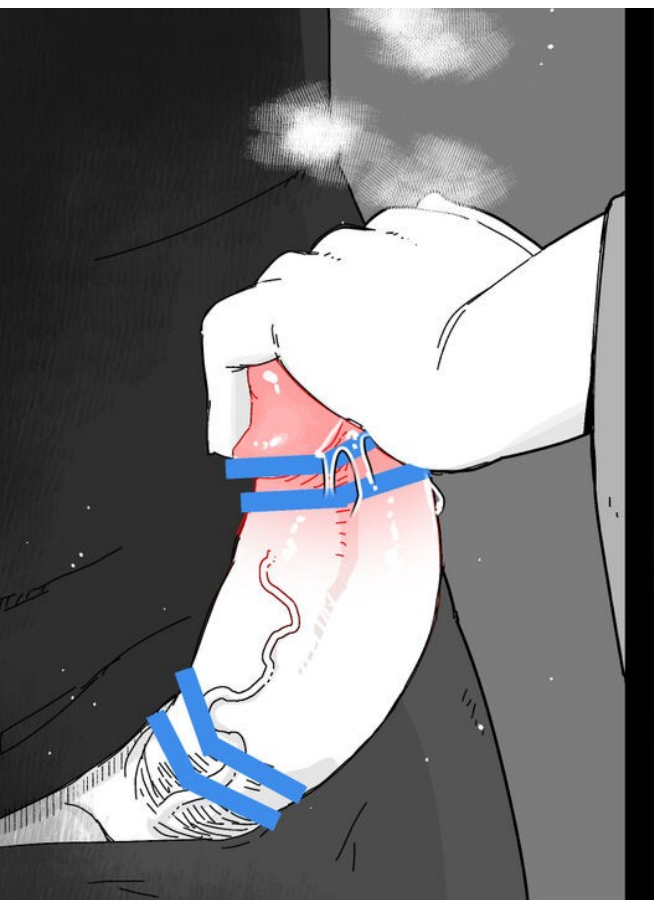


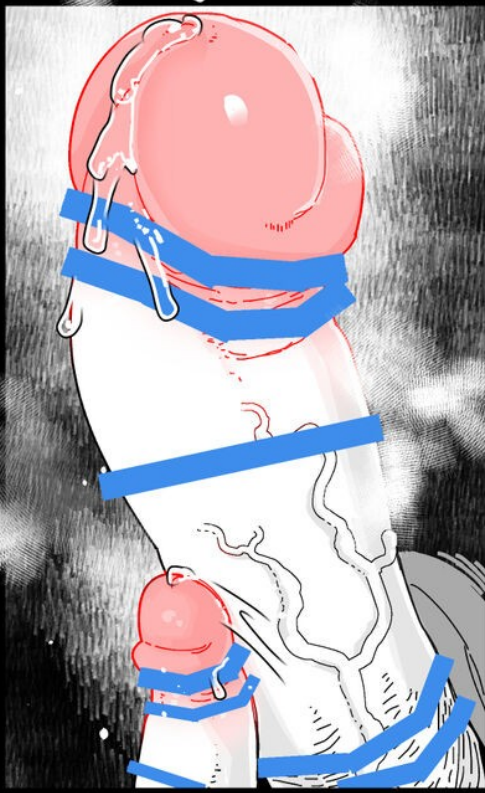








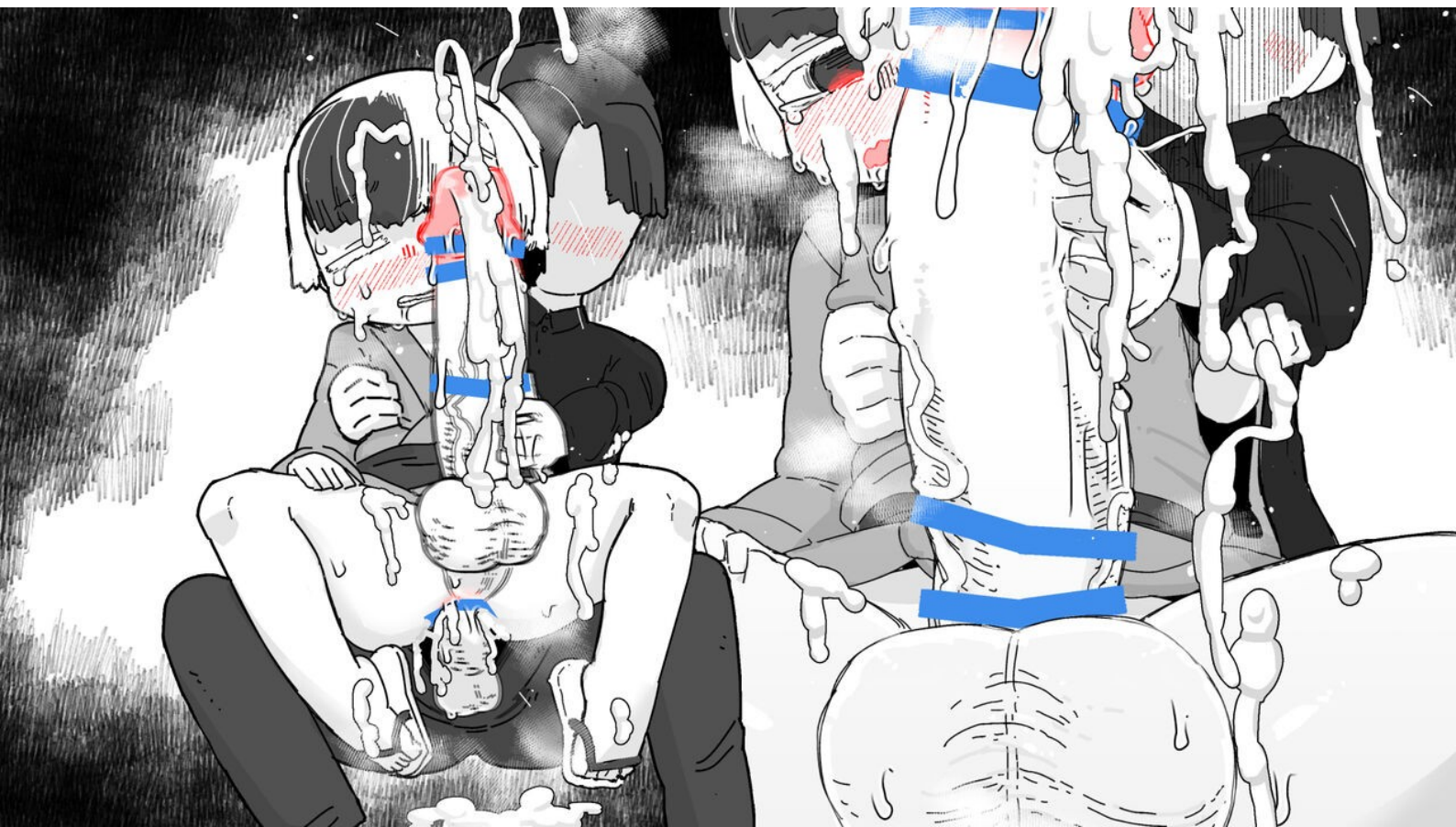




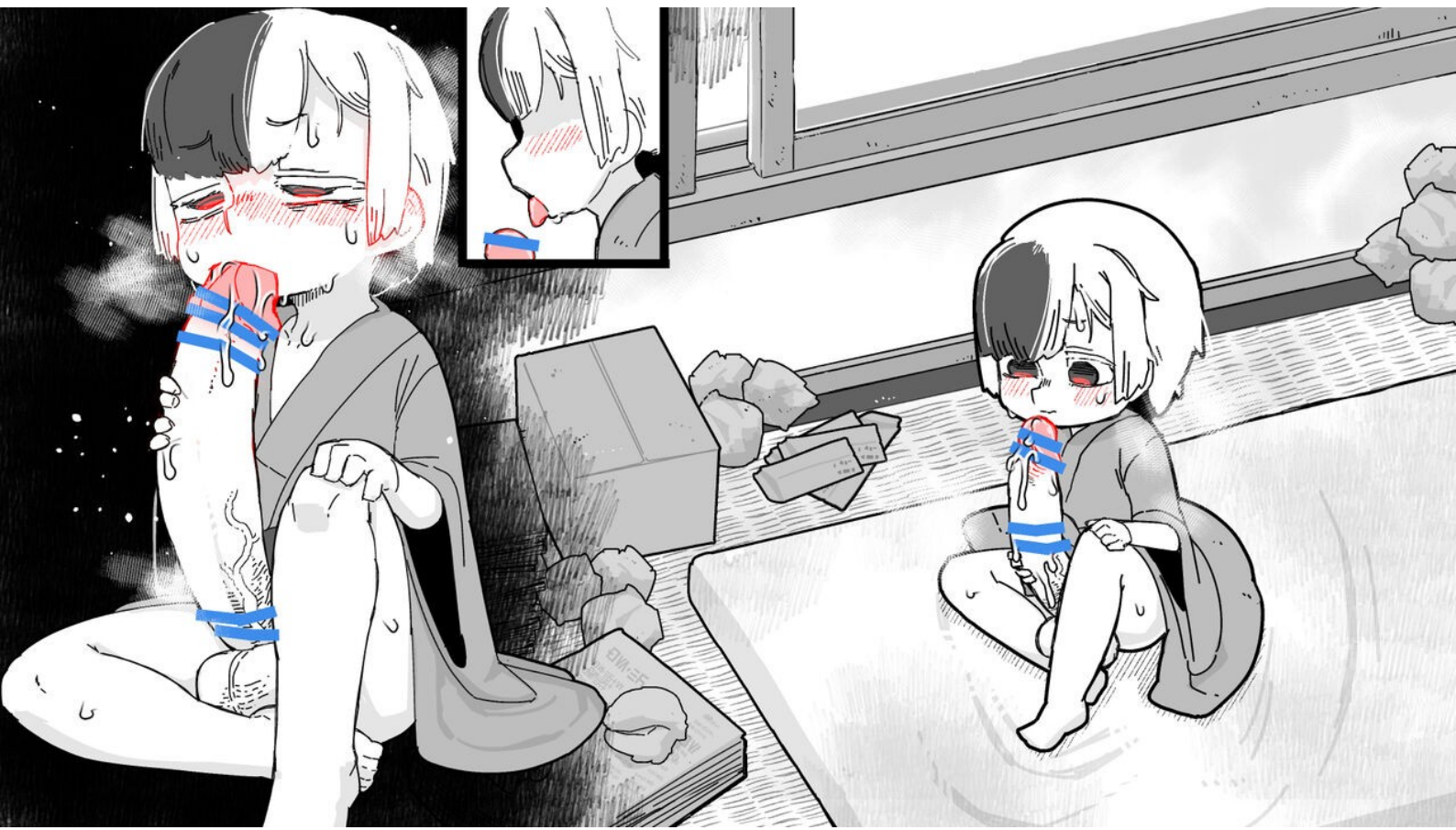


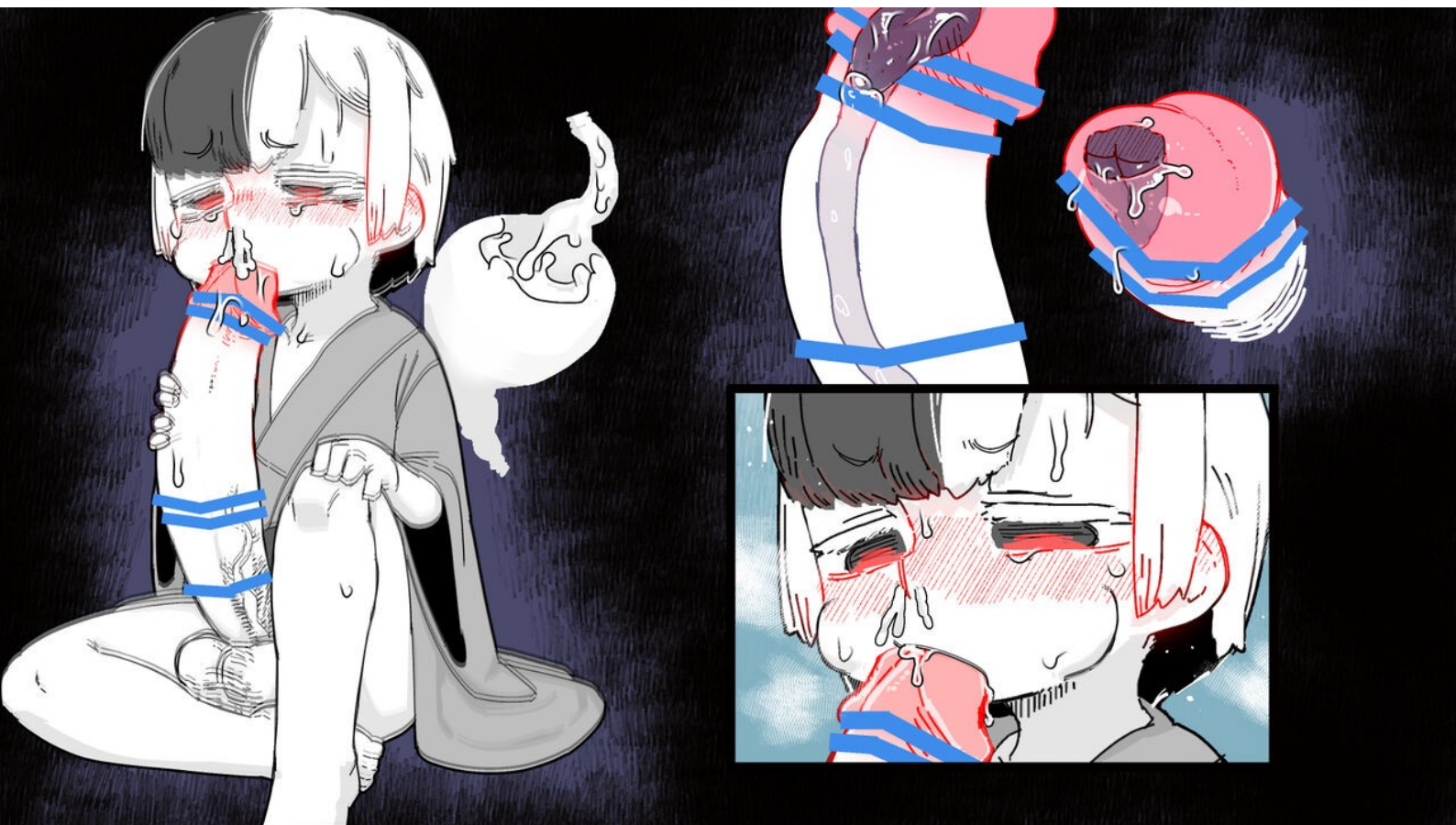


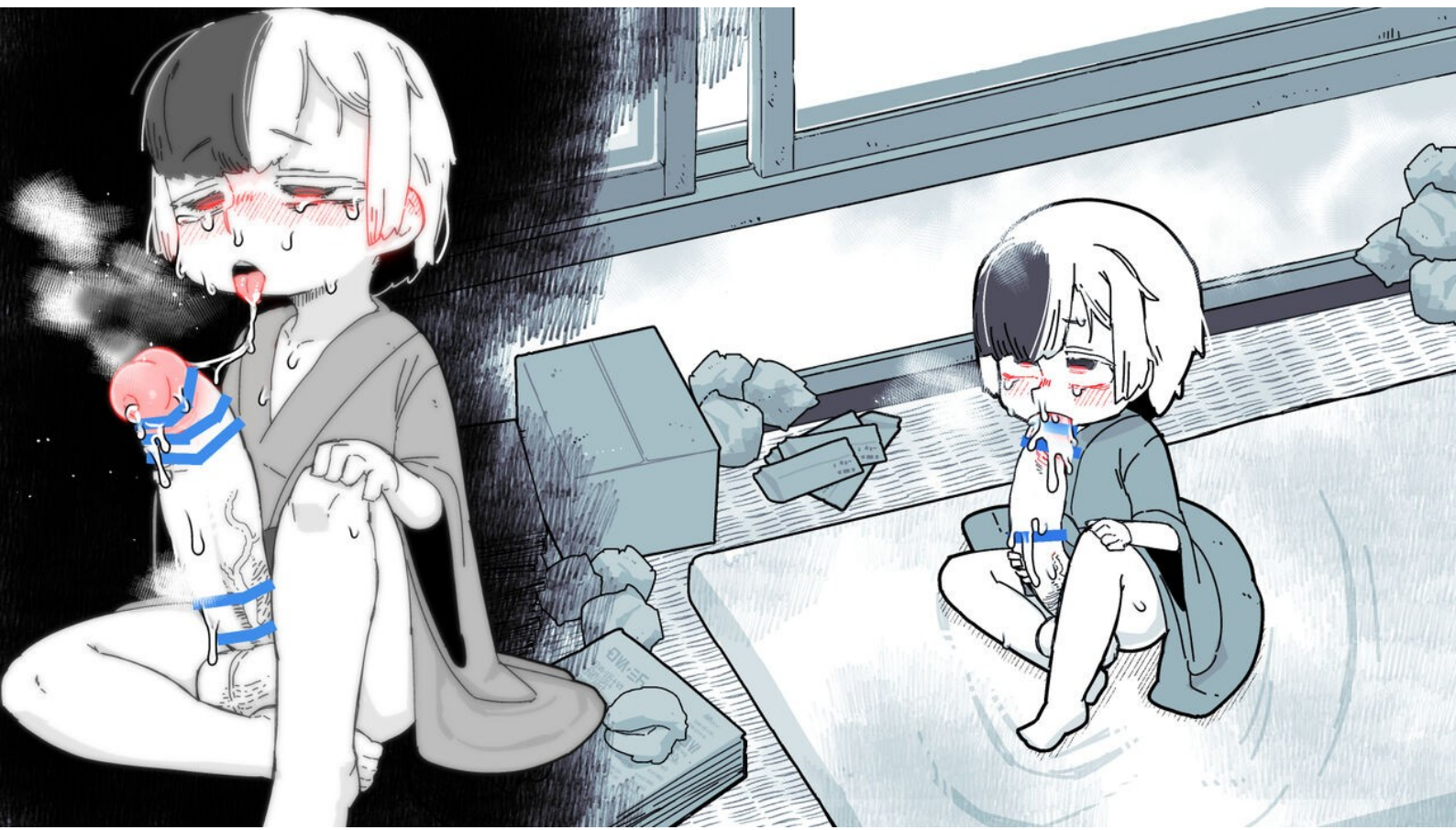


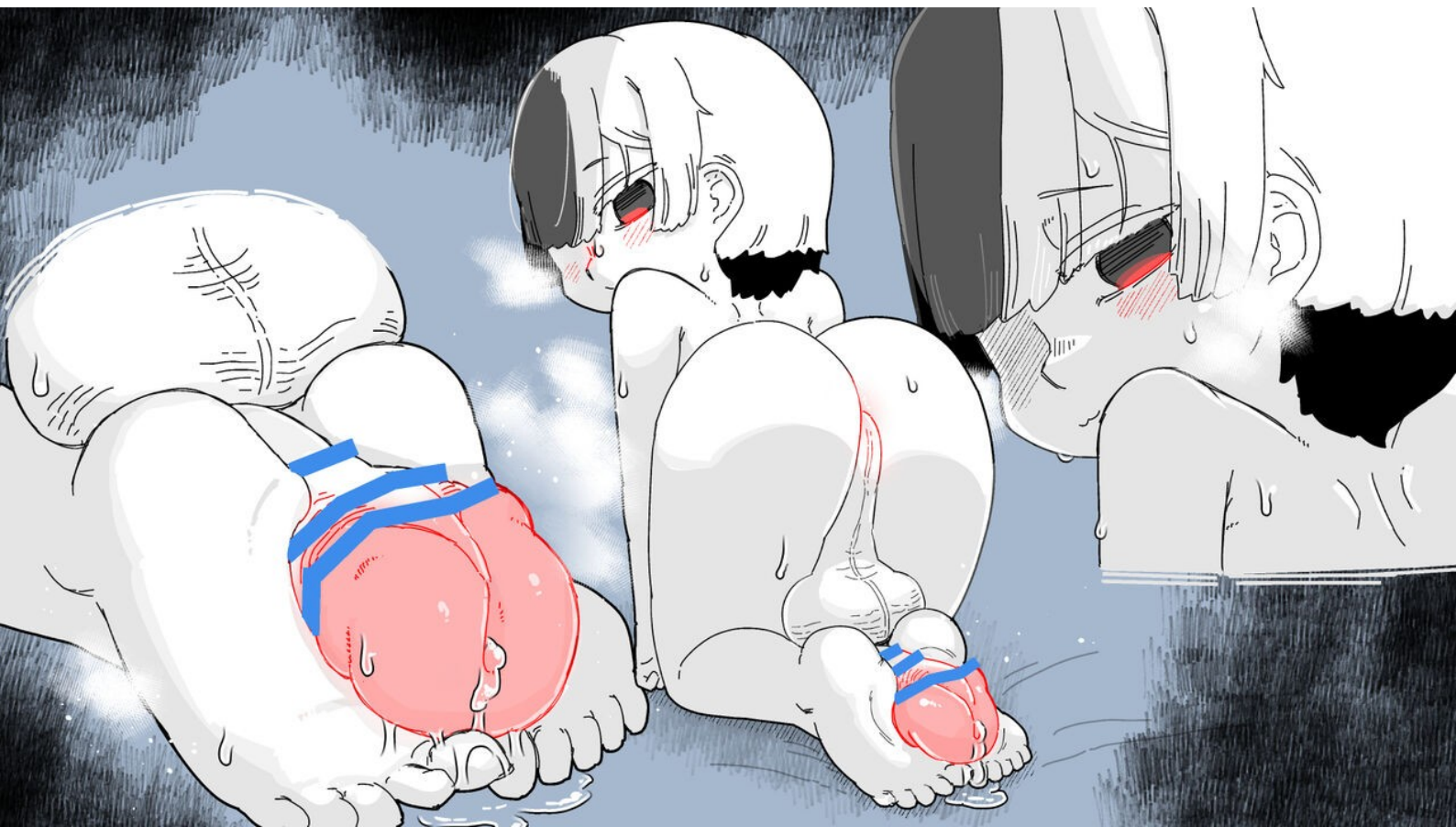


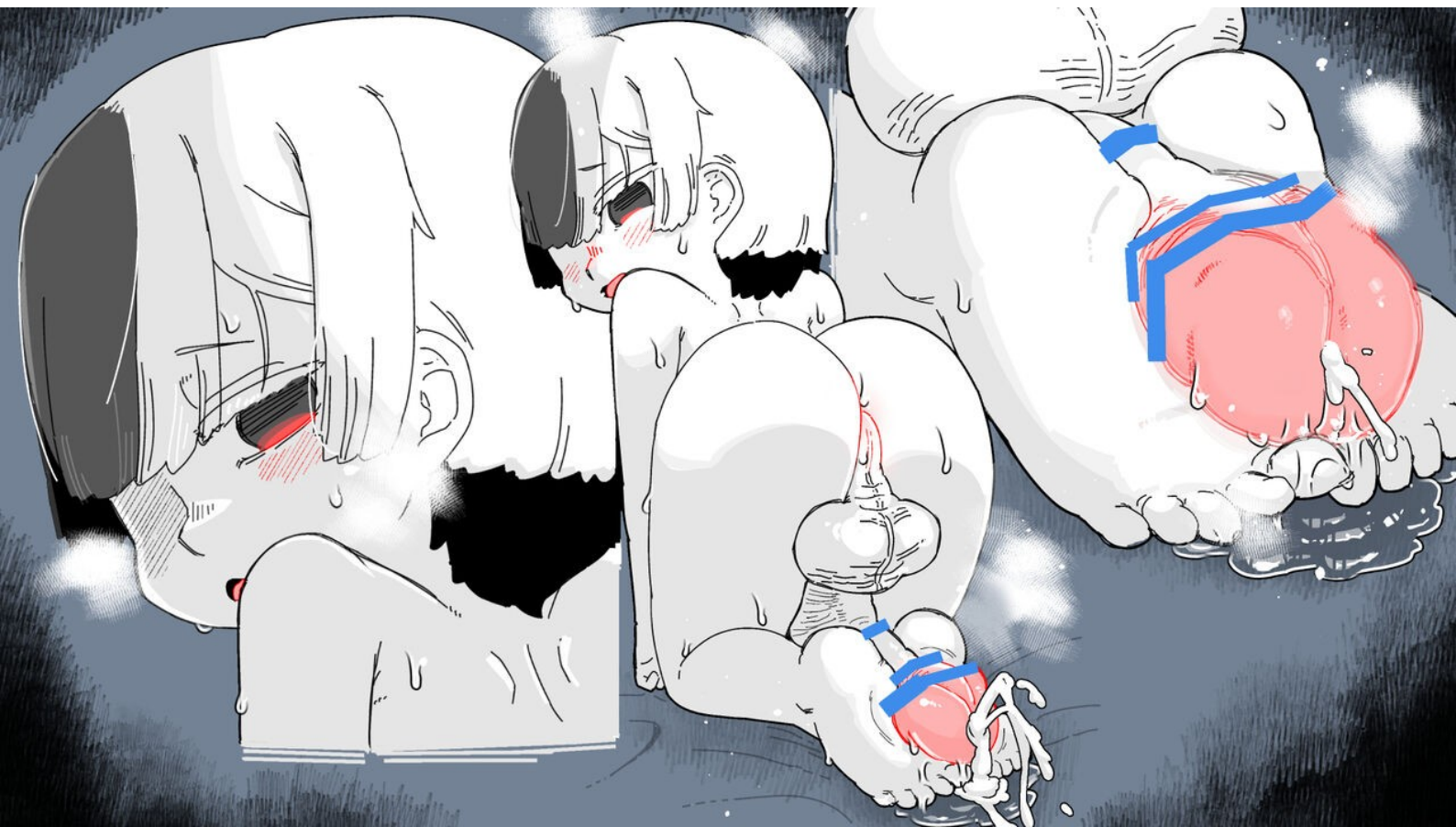


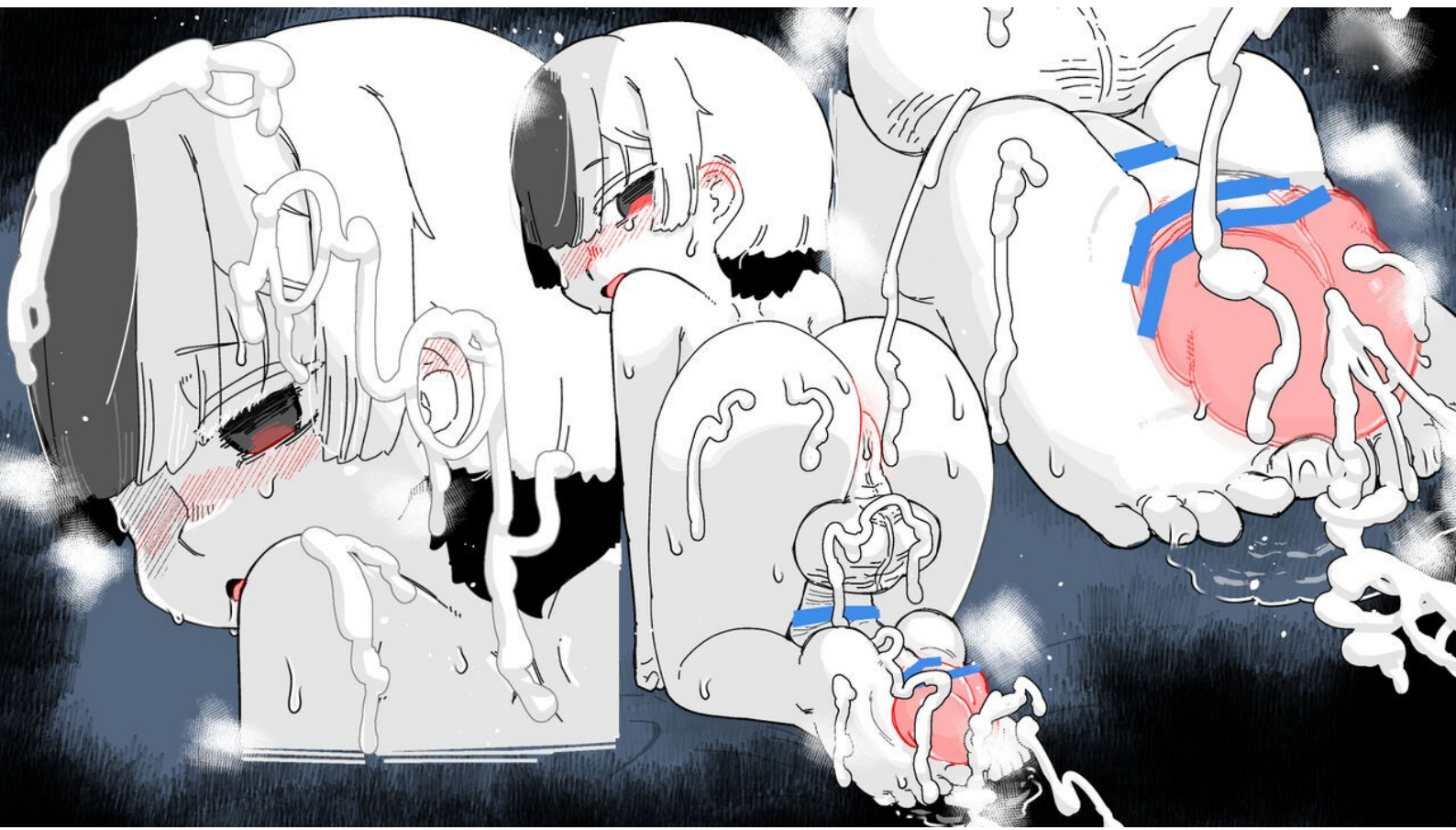












Handwritten Chinese text on a tilted card, including the characters "王" (Wang) and "王" (Wang).





